

目次

短期海外研修（香港）によせて	2
参加者プロフィール	3
香港基本情報	8
香港中文大学紹介	12
香港日本人商工会議所の訪問	17
ビジネス研修の概要	20
各企業でのビジネス研修	21
香港中文大学 Summer Program	52
個人エッセイ	65
編集後記	98

【コラム】

(1) 中文大学 食堂巡り	15
(2) コンクリートジャングル、香港	50
(3) FOOD EXPO 2019	62
(4) 海外研修だからこそできた交流	96

*飲酒に関する記述については、当事者の年齢確認を取っていることを申し添えます。

短期海外研修(香港)によせて

社会学研究科 (国際教育交流センター兼任) 講師 田口陽子

2019年度で4回目となる香港での短期海外研修には、過去最大の12名の学生が参加した。本研修は、事前授業、香港での現地研修、そして本報告書作成の3部から構成されている。現地研修には、1週間のビジネス研修(7月28日から8月2日)と香港中文大学での3週間のサマー・スクール(中国語研修)(8月5日から23日)が組み込まれている。ビジネス研修では、香港日本人商工会議所でのセミナー、香港における複数の企業でのJob Shadowing(3日間)と成果報告会、香港ヤクルト工場見学を行った。

研修期間中の香港では、逃亡犯条例改正案への反対を発端とした民主化デモが、市民と警察のあいだの衝突へと拡大した。研修参加者には、幼少期を香港で過ごした人から海外が初めてという人まで多様な学生が含まれていたが、どの学生にとっても、現地の人びとのさまざまな想いやふるまいを見聞きし、香港の政治経済状況を肌で感じたことは、貴重な経験となったことだろう。2019年の夏を香港で過ごしたことが、自分の生きる世界へのかかわり方を捉えなおすきっかけになったとしたら、研修の目的は達成されたといえよう。その片りんは、本報告書のさまざまなページにあらわれている。

本研修では参加者の安全を最優先するために現地スタッフと連携し、全員が無事に全日程を終えることができた。学生を受け入れてくださった中文大学や企業のみなさまに、そして研修を支えてくださったすべての方々に、心より感謝を申し上げる(2019年11月)。

全学共通教育センター 教授 太田 浩

「国境をまたぐ能力」を身につけ、「アウェーで実力を発揮できる自信」を獲得することを標榜する本学の短期海外研修は、グローバル市民としての“第一歩”を踏み出すプログラムと言える。香港での当該研修は、春夏学期の本学での事前学習のときから香港の歴史と政治、そして民主化運動を意識せざるを得なかった。過去25年間に渡って香港を見てきた私にとっても、複雑な気持ちと戸惑いが交錯していた。

香港人は香港のことをよく“a borrowed place on borrowed time”と言っていた。このフレーズには、いろいろな意味が込められている。永らく植民地支配を受けた香港は、かりそめの土地で、かりそめの時を過ごすところであり、支配者だけでなく、香港人にとっても決して自分たちの場所(祖国)にはならないという、あきらめとやるせなさを感じさせるものであった。香港人のビジネスと金儲けに対する強い執着心は、その反動なのかもしれない。しかし、香港の目覚ましい経済的繁栄は解決策とはならなかった。一国二制度の限界、拡大する貧富の格差への不満、将来への不安は、逆に香港人としての自覚と香港を自分たちのホームとする意識を若者たちに芽生えさせた。本研修の参加学生が香港に滞在している間にも、民主化運動は拡大し、一部は先鋭化した。帰国後、この報告書を作っている間も事態は深刻化しており、ついに香港中文大学内でも衝突が起こり、火の手が上がっている。研修に参加した学生には、この光景がどのように映り、何を想うのだろうか。将来振り返った時、2019年の夏に貴重な経験をした香港が人生の転機であったということになるかもしれない。香港にあの平和で安全な日常が戻ってくることを願ってやまない(2019年11月)。

参加者プロフィール

(参加者 12 名 / 学年順に記載)

◆◆◆1年生(2名)◆◆◆

安永殷/商学部1年



アン君。全てを兼ね備えた男の子。その凛々しさと可愛さを兼ね備えた美貌に国境を超えた全関係者が「カッコいい」ということの意味を再認識した。その容貌に留まらず、彼の

コミュ力は他を圧倒。プレゼンでは日本語の発音の可愛さで否応なしの同意をあざとく誘い、しかし、ツッコミでは堪能すぎる日本語と早すぎる頭の回転で相手に反論。危ない時は頬をかいて可愛くカバー。完璧。しかし唯一の弱みはお酒。酔うと深夜でも彼女に電話する。何を言っているかは、本人も含めて誰もわからない。むにやむにや。(栗田寛樹)

林穂高/商学部1年



ほだちゃん。研修メンバーの妹ポジ。ひとつ上の自分をいつも先輩！と呼んでくれた。彼女に先輩！と呼ばれて嬉しくない先輩はいないと思う。とてもかわいい。そんな彼女はホームシックのあまり、日本の

お菓子を爆買いしては常に持ち歩き、スマホを駆使して日本の友達とのチャットや深夜電話をよくしていた。またなぜか「違いますよ！」が口癖で、電話になると口調がギャルっぽくなり、先輩の隠し撮りをして楽しむという謎の生態を持つ。しかし、そんな変わった面だけでなく、中国語の勉強をクラスで一番頑張る勉強熱心な一面や、さらには他の人の調子が悪い時に重い荷物をすぐに持とうとしてくれる優しい一面もあるのだ。ミステリアスでかわいくて頑張り屋さんで優しい、一言で表せない魅力的な人である。(井上菜緒子)

◇◆◇2年生（8名）◇◆◇

石井遥菜/社会学部2年



香港研修におけるお母さん的な存在であり、みんなの悩み相談に乗ってくれる優しい人。中国語のクラスはレベル1だが、中国語を勉強した経験があり、他の学生達の学習を手伝ってくれる。日常生活に関しては、かなりのロング・スリーパーで週末には10時間以上寝ているという。また、部屋は井上さんと同じ部屋であり、お互い部屋の使い方がイマイチなので、二人の部屋である307号室には二つの（洋服の）山があったという伝説がある。普段話す時はいつも他人を笑わせるためにふざけて話すことが多いが、内面ではちゃんと真面目に深く考えていて、いざという時頼りになる先輩である。（安永殷）

石井湧介/商学部2年



この世には2種類の人間がいる。勤勉な人間と怠惰な人間である。石井湧介は間違いなく前者に該当する。毎朝6時に起き中国語を勉強し、夜はジムでしっかりと体を鍛える。香港において彼は誰よりも自分を追い込んだ。そんな姿に感銘を受けたのは私だけではない。

そのライフスタイルと愛嬌たっぷりのベビーフェイスは、国内外の紳士淑女諸君をも魅了した。彼は正しく香港研修生の模範であろう。ただし、うわああああああと鳴くのが玉に瑕。（田村草太）

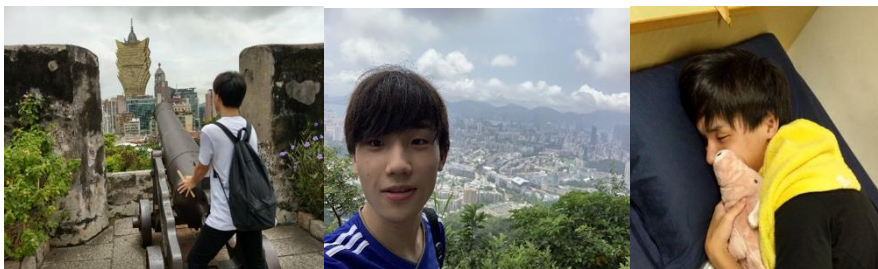
井上菜緒子/社会学部 2年



なおちゃん。この一か月間彼女の超ド級の天然さに、何度笑顔にさせてもらったかわからない。とにもかくにも、寝ることが大好きで授業の休み時間、大学内を移動するバスの中等々、暇さえあれば眠っていた。マイペースでのんびり屋さんなところはありますが、筋

力をしたり、行きたいと思ったところには必ず行ったりするアクティブな一面や、ネットに強く、Wi-Fiの調子が悪く困っている研修メンバーを助けている場面も見られ、頼れる一面もある素敵な人。毎朝バスに乗り遅れそうで必ず間に合う、などなど多くのエピソードを持つ彼女は一緒にいていつも楽しかったです。(角田友佳子)

諏訪敦史/社会学部 2年



変態グローバル系オシャレボーイ 諏訪。香港 IKEA で一目ぼれした「ピッグ (ブタのぬいぐるみ)」を、

誕生日でもないのに春名くんに誕生日プレゼントと称し与え、自らこよなく愛す、おちゃめな男。情報収集力がすごく、いろんな国の人と交流し、食事やデモ、日本の近況まで網羅する。香港在住経験を活かし、みんなをリードしてくれた。(馬場敦也)

角田友佳子/社会学部 2年



とってもかわいくて、優しくからかいがいのあるつのちゃん先輩。ボケ担当が多い研修メンバー内ですどいツッコミを炸裂させていた。中国語を夜遅くまで勉強するなど

頑張り屋さんで一番の常識人で読書家だけど、寝落ちしたりよく物をなくしたりと、ちょっとおっちょこちょいな一面も。写真を撮り続けたら、だんだんポーズをとってくれなくなるツンデレさも兼ね備えている。でも部屋のエアコンが壊れたときに、寮のおばちゃんに英語で伝えてくれて、とても頼もしかったです！せんぱいかわい〜!! (林穂高)

春名陽/社会学部 2年



一言で言うと真面目系...だと思ったが、この男、一言では語り尽くせない漢なのだ。せっかくの日曜日を中国語の学習に費やすレベルの真面目系かと思いきや、別の一面では可愛らしい姿を見せる。いやその姿が愛おしいのだ。男にも好かれる理由がわかる。一方で香港でのデートのレポートを書いたり、相棒の pig (ブタのぬいぐるみ) と仲良くしたり、行動が謎でもある。中国語に関しては誰よりもプロフェッショナルであり、ルームメイトでもあったため色々助けになった。マカオでの行動力は惚れました。(諏訪敦史)

馬場敦也/商学部 2年



飯好き。馬場くんのおかげでうまい飯にありつけたわ。そして、きれい好き。ちんすこうまんじゅう大好き。部屋でいつも勉強していた。単語カードも作って、自分が見る範囲で一番勉強していたんじゃないかと思う。自己管理がよくできる人だと思う。筋トレもよくやっていたし、みんなのためにもよく動いてくれた。マカオに行って、ランチの飯屋で40分待ちになったときも、一人で待っていてくれ、他の人たちを観光させてくれた。あと、ホスピタリティが高いですね。(春名陽)

山口悠作/法学部 2年



マカオにて携帯を落とした男。警察を巻き込んだ6時間を超える捜索の末、携帯発見の一報が入った時は、全研修生が沸いた。言語においては人一倍の好奇心を持っており、英語・中国語・韓国語に精通する。ルームメイトである私は、彼の語学センスにいつも羨望の目を向けていた。特技はダンスであり、深夜になると踊り始める。早く寝てしまう私を気遣い、他の人の部屋で踊ってくれる心優しき青年。(石井湧介)

◆◆◆ 4年生 (1名) ◆◆◆

栗田寛樹/経済学部 4年



クラスはレベル3で、就活を終え某有名コンサルタント企業に就職予定の小平寮住み経済学部4年生。周りからはくりちゃんと呼ばれていた。英語が流ちょうに話せたり、プログラミングができたり、足がとて速かったり(中学生のとき800m全国3位)と、様々な驚く特技を持っている。一橋大学のみんなで街に出かけるときは先陣を切ってとても頼りになるお兄さんだった。自由時間にはよく卓球をしていて、速いスマッシュに、私山口は対応できなかった。(山口悠作)

◆◆◆ M1年生 (1名) ◆◆◆

田村草太/経営分析プログラム 1年



彼のポジションは盛り上げ隊長。鍛え上げられた肉体が繰り出すギャグには香港中が笑った。そんな彼の、言語の壁をも越えていく姿は皆のあこがれの的だったに違いない。豊富な経験と知識で人間分析を行い、メンバーの様々な悩みも解決してきた。人生の指針を示してくれる一方で、道案内となればよその庭。彼とCUHKで迷子になったことは、一生忘れない。(石井遥菜)

香港基本情報

井上菜緒子

1) 正式名称

中華人民共和国香港特別行政区

英語での正式名称は Hong Kong Special Administrative Region。

しばしば Hong Kong SAR と表記される。

右は香港特別行政区の区旗であり、中央の花は香港のシンボルであるバウヒニア。



2) 地理的位置

中国大陸の南東部に位置する。日本との時差は1時間。世界有数のハブ空港として世界165以上の都市と直行便で結ばれていて、東アジア・東南アジアの玄関口になっている。中国返還後は経済的にも中国本土との結びつきが強くなっており、香港と中国本土の都市間で週830便以上のフライトが運航されている。アジアの主な主要都市が香港から4時間の飛行距離内にあり、5時間のフライトの範囲内に世界人口の半分が住んでいる。



3) 人口

2018年時点で752万人。合計特殊出生率は1.20と少子高齢化が進んでいるが、中国本土の人達を中心とした移民を受け入れていることで香港全体の人口は増えている。

4) 面積・土地利用

面積は1,103平方キロメートル（東京都の約半分）。中国の南東部に位置し、香港島、ランタオ島、九龍半島、新界、262の離島から形成されている。国土の約40%が自然保護区に指定されており、開発された土地は25%に満たない。人口密度は香港全土で6,753人/km²（2018）だが、市街地に限ると25,900人/km²となり、非常に高い。ちなみに日本全体の人口密度は335人/km²（2017）。

5) 民族

漢民族が90%以上を占めるが、出稼ぎの外国人の増加によって、その割合は少し低下している。他多い順にフィリピン人、インドネシア人、インド人など。

6) 公用語 中国語（広東語）、英語

日常会話は広東語が中心だが、半数近くの人には英語も使いこなす。19世紀半ばから1970年代までの間公用語は英語のみだったが、1974年に中国語と英語の両方に改められた。中国本土との結びつきが強まった昨今は、北京語が使える人が急速に増加している。漢字は中国本土と異なる繁体字を使用。

7) 気候

亜熱帯気候で、ケッペンの気候区分ではCw（夏は多湿・冬は乾燥）。春は平均気温17～26℃で日本に比べ雨が多く、湿度が高い。研修のある夏は、日本同様高温多湿だが、日本に比べ冷房が強力なので寒がりな人は、室内で上着が必須。秋は春と平均気温は変わらないが、湿気が収まり観光のベストシーズンとなる。冬は平均気温16～18℃であり日本よりは暖かいが、旧正月（1月下旬）には10℃を下回ることがある。夏から秋に台風が香港島を直撃する際には、香港気象台から警報が出され、シグナル8以上になると公共交通機関は止まり、会社・学校・小売店は全て休みになる。実際、Job shadowing 3日目でシグナル8が出た際は、路線バスは大行列・校内バスは運休になったため早めの帰宅が大切である。

8) 交通

中心部には7路線の地下鉄（MTR）のほか、バス、ミニバス、トラム、軽鉄、タクシー、フェリーなど様々な交通機関が存在し、料金も日本と比べると安価である（タクシーの初乗り運賃は280円～、香港中心部から尖沙咀までのフェリー（→）はなんと約40円～）。特にMTRは運行本数が多く乗り換えが容易であり、利便性が高い。ちなみにMTRは電車内だけでなくホームでの飲食も禁止なので、パンなどをホームではお張らないように注意。また、日本のSuicaに似たオクトパスカード（八达通）というプリペイドカードがあり、交通機関や買い物、大学構内の寮におけるランドリーや学食、自販機などでも使用できる。チャージは駅やセブンイレブン、また大学内の学食のレジでもできる。



フェリーからの夜景

9) 通貨・物価

通貨は香港ドル。1香港ドル=14円前後。経済的に中国本土との結びつきが強い香港だが、通貨に関しては1ドル=7.75～7.85香港ドルの固定相場制が取られている。ちなみに香港で紙幣を発行する銀行は、香港上海銀行（HSBC）、香港渣打銀行（Standard Chartered Bank）、中国銀行（Bank of China）の3行があり、それぞれ微妙に絵柄が異なるので、見比べてみる

と面白い。物価に関しては、不動産・家賃が世界トップレベルに高い。交通費は初乗り運賃が安いことと、香港自体が狭いのでかなり安い。お酒も消費税・酒税がかからないため安い（飲みすぎ注意）。他は、日本とそれほどかわらないと感じる場面が多い。

10) (超概略) 歴史

香港は 1842 年の南京条約以降、英国の植民地となった。元来十分な水深と波の穏やかさを兼ね備えた天然の良港だった香港は、この植民地化によって英国の軍事、貿易拠点となり、英国の自由放任な経済政策や最小限の行政などによって大きな経済発展を遂げた。1997 年に中国へ返還。

11) 政治

香港の実質的な憲法にあたる基本法（中華人民共和国香港特別行政区基本法）に記された一国二制度の原則（第 2 条）のもとで、1997 年の返還から 50 年間は外交と国防を除く「高度な自治」が認められている（第 5 条）。資本主義や中国本土では制約される言論・報道・出版の自由、集会や信仰の自由などが保証されるなど、中国本土とは異なる経済・政治制度を維持することが定められた。また、WTO や APEC などの国際的会議にも独自の立場で参加している。

行政長官は香港特別行政区の首長であり、中央人民政府と香港特別行政区に対して責任を負う（第 43 条）。現在の行政長官は林鄭月娥氏。立法機関は立法会で、現在の定員は 70 名。うち 35 名は直接選挙、35 名は職能別団体選挙で選出される。

2014 年には学生たちが行政長官の直接選挙を求めた雨傘運動が起こり、2019 年には逃亡犯条例の制定に反対する運動から 100 万人規模の大規模なデモが発生した。逃亡犯条例が撤回された今も警察や行政長官の対応をめぐって連日デモが続いている。

なお、香港の中でも多様な政治的主張があり、民族的・歴史的・経済的な要因も絡むため、香港人に政治の話題を振る時はデリケートな対応が必要であることに注意。

12) 経済

主要産業は金融業・不動産業・観光業・貿易業などのサービス産業で、GDP の 9 割以上を占める。一方製造業の拠点は 1990 年代前半までに中国本土への移転が進み、GDP に占める割合も低い。現在一人当たり GDP は 48,517 米ドル（2018）であり、同年の日本の一人当たり GDP（39,305 米ドル）より高い。会社の設立が容易であり、設立コストを低く抑えることも可能で、アジア各地にアクセスしやすいため、世界中の多くの企業が香港にアジア拠点を構えている。欧米系の透明な法制度や、簡素で低率の税制（法人税 16.5%、個人所得税最高税率 15%、キャピタルゲイン・利子非課税）などが香港経済の特徴であり、こうした制度的・社会的インフラを基礎として国際金融及び物流の拠点としての地位を築いている。

参考資料

外務省 香港基本データ

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/hongkong/data.html>

香港政府統計処 香港統計數字一覽 (最新數字)

<https://www.censtatd.gov.hk/hkstat/hkif/index.jsp>

香港經濟貿易代表部 香港の基本情報

<https://www.hketotyo.gov.hk/japan/jp/about-hongkong/>

GovHK 香港政府一站通 香港概況

<https://www.gov.hk/tc/about/abouthk/facts.htm>

香港國際機場 香港國際機場興香港

<https://www.threerunwaysystem.com/tc/growth/hkia-hong-kong>

アジア経済ニュース 香港の総人口

<https://www.nna.jp/news/show/1871539>

山口銀行 海外進出サポート>香港の概況と投資環境

<https://www.yamaguchibank.co.jp/corporate/consultation/pdf/26hongkong.pdf>

地球の歩き方 香港基本情報

<https://www.arukikata.co.jp/country/HK/>

まっぷる 香港の基本データ

<https://www.mapple.net/global/article/25154/>

JTB 香港の気候と服装、観光のベストシーズン

https://www.jtb.co.jp/kaigai_guide/report/HK/2017/07/hongkong-climate-clothing.html

(以上最終閲覧日 2019-9-30)

香港中文大学紹介

井上菜緒子

1) 概要

香港中文大学は新界地区東部に位置する香港の公立大学。英語名は **The Chinese University of Hong Kong**、略称は **CUHK**。香港大学、香港科技大学と並ぶ、香港3大大学の一つであり、世界大学ランキングの上位100位以内の常連である。特に、香港中文大学のビジネススクールは、アジア最古の歴史を誇るMBAとして世界的に有名である。

文学院、工商管理学院、教育学院、工程学院（工学部）、医学院、法学院、理学院及び社会科学部の8学部61学系（専攻科）を有していて、大学の全学生数は20,000人前後である（一橋大学は約6,000人）。1990年からは日本研究学科が文学院に設立され、約500名の学生が日本語や日本の文化、歴史、社会、言語学などを学んでいるほか、日本の多くの大学と交換留学の協定を結んでいるなど、日本とのつながりも深い。

英語で教育する香港大学に対抗するため、1964年に従来あった3つのカレッジが統合する形で成立した。香港で唯一英国式のカレッジ制をとっており、学生は学部（**faculty**）と書院（**college**）の両方に所属する。カレッジごとに寮や食堂、また季節ごとのイベントがあり学生の結びつきが強く、お揃いのTシャツをみんなを着て、お昼時、食堂に大人数が集まって独特の歌やリズムを練習し、またある時は夜集まって話す姿をよく見かけた。また香港「中文」大学という名前にもあるように、大学成立当初から中国文化の研究に力を入れており、独自の博物館や研究拠点を持っている。



メインエントランス



CUHKの最高点から海を見下ろすメンバー

2) キャンパス・施設

大学の敷地に大学駅が隣接しているが、一橋大学の4倍の大きさの137.3ヘクタールの広大な敷地を持ち、多くの建物が山の上や中腹にあるので、学内や市内への移動には無料校内バス（校巴）が不可欠である。ただし、早朝や台風時、深夜にはバスがないことがあるので大学駅から寮までの徒歩ルートも確認しておいた方がよい。

キャンパス内には9つの書院、33の食堂、6つの図書館、ジム、プール、スーパー、保健センターなど様々な施設があり、寮生は大学内だけで生活を完結させることができる。日本食のお店もあれば、激安のバジェット・ミール、アイスのジェラートがあるカフェなど場所によりメニューが異なるので色々試してみると面白い。

(→コラム 中文大学食堂巡りをご参照あれ！)

3) 寮での生活

私たちサマープログラムの受講者が入寮したのは和聲書院 (Lee Woo Sing College) であり、大学内でも新しくてきれいな寮だった。大学駅からは、バスで20分ほどかけて登った丘の上に位置する。2人1部屋だが、私たちは男女ともに偶数だったため、みな一橋大学の人と同室になった。



部屋のフロアには、共有のキッチン・談話スペース、シャワーがあり、エントランスの階にはATM、卓球台、カフェや自販機、地下にはジム、食堂やコインランドリー(1回5HK\$)があるなど設備が充実していた。



地下1Fにあるジム



卓球を楽しむメンバー

食堂以外はどれもカードキーがないと立ち入れないことになっているのだが、私たちが到着して2日間カードキーが有効になっていなかった時は、ゲートをすり抜けたり、受付のおばさんを呼んだりして凌ぐことができた。

寮のキッチンで料理をする機会はあまり多くないが、調理器具や食器は一通り揃っているの、スーパーで買った果物を剥くくらいは気軽にできる。

さらに、サマープログラム参加者の中で希望者が抽選で参加できるCooking Classでは、寮内の調理室で中華料理やエッグタルト作り(→)を楽しむことができた。



ーその他寮生活でのおすすめ事項ー

・トイレトペーパーは最初に 1 ロールだけ配られるが足りないので、大学内のスーパーで売っているものを研修メンバーで割り勘した。他にも洗剤や〇つ買うと 1 つ無料となる食料品なども割り勘がおすすめ。

・キッチンには熱湯が出る機械と浄水器もついているが、水のケミカルな味が気になる人はティーバッグやペットボトルを買うのをおすすめする（ちなみに来年もあるかは分からないが、授業でよく使う康本国際学園の G 階にウォーター・サーバーがあり、水筒やペットボトルを持っていけばおいしい水が手に入るため、その場合はわざわざスーパーで 5L の水を買って寮まで山登りをする必要はない。5L は重かった...）。

・Wi-Fi は CUHK1x という SSID の物を 1 度登録すれば、部屋でも教室でも学内の建物にいる限りはずっと使うことができる。詳しくは”CUHK wifi”で検索してください。

参考資料

CUHK “Introducing CUHK”

<http://www.cuhk.edu.hk/english/aboutus/university-intro.html>

Lee Woo Sing College “Summer Residence”

<http://www.ws.cuhk.edu.hk/accommodation/hostel-service/summer-residence-ext>

QS TOP UNIVERSITIES “QS world university rankings”

<https://www.topuniversities.com/university-rankings/world-university-rankings/2020>

(以上参照閲覧日 2019-9-30)

中文大学 食堂巡り

林穂高

中文大学の紹介を読まれた方はご存じのとおり、中文大学はとにかく広い！
様々な場所に大学の施設や寮が点在しているためバスでの移動が欠かせない。終バスを逃したときの寮までの道は恐ろしく長く、大学内で迷子になったときの絶望感と言ったら筆舌に尽くしがたいほどである。それはさておき、その広さのため大学内には数多の食堂が存在しているのだ。

香港にきた当初我々、主に私はある深刻な問題に直面していた。
それは、「寮の食堂の料理が口に合わない」ということだ。

今回の研修で私たちが滞在した寮には地下に食堂があり、わりと好きな時間にごはんを手軽に食べることができた。右のように、注文カウンター近くにメニューが書かれた電子ボードがあるので、注文も簡単に行うことができた。しかし、手軽で安価であるということは、ハズレもまざっているのだ……。もちろん英語でも書いてあるのだが、写真がないためどんな料理かは分からない。初日にトラブルで部屋の鍵をかけることができなくなり、ご飯を切望していた時のハズレは寮の食堂に苦手意識を持つのに十分であった。しかし、共用のキッチンには自炊できるほど皿などもそろっておらず、食べ物もそろえることは難しい。つまり、おいしい食堂を探すしか他に道はなかったのである。



ということで、今回はそんな食堂巡りのなかで見つけた中文大学の数ある食堂のなかでも、とびきり便利でおいしい食堂を個人的な意見とともに紹介する。

① ヤスモトビル近くの食堂

Chung Chi College Student Canteen

授業をうけるヤスモトビルのすぐ近くにある食堂で、2階にも食べる場所があるので混んでいても安心だ。炒飯などは、量も多いのでテイクアウトすれば夕飯にもなる優れものだった。ここのおすすめは、なんととってもみんな大好き 12.5HK ドルごはん！米に野菜、ハムやソーセージ



12.5HK ドルごはん

などがついて破格のお値段なんとおおよそ 175 円！
ランチにぴったり、コスパも最強なのでぜひ金欠の時はこちらへどうぞ。

② ヤスモトビル隣の建物内にあるカフェ Cafe330

① から③のなかでは一番ヤスモトビルに近い Cafe330。コーヒーなどのドリンクだけでなく、サンドイッチやカップケーキもおいてあるので空腹時でも十分楽しめる。もちろんサンドイッチのお味はとてもおいしいし、日本のものと種類もあまり変わらないのできっと皆さんおいしく食べられるだろう。



Cafe330



Paper and Coffee

③ ①の近くの建物内にある日式食堂 Paper and Coffee

① から③のなかで最もおいしい食堂だった。今年になって新しくできたばかりで、とてもおしゃれな店内だった。なんとここではジャポニカ米を食べることができる！お米に対して「香港味がする」と言っていた、某せんぱいも絶賛するほどのおいしさだった。ほかの食堂と比べるとほんの少し高めですが、そんなことは全く気にならないくらいのおいしさで、野菜もたくさん食べることができる。カレーもあるが、そこまで辛くないので辛いものが苦手な人も、おいしく食べることができておすすめだ。

また食堂ではオクトパスカードをチャージできるお店もあり、電子パネルで支払も簡単にすんで便利だった。オクトパスカードは肌身離さずに！ぜひいろんなところにでかけておいしい食堂を探してほしい！

香港日本人商工会議所の訪問

田村草太

【実施日】

2019年7月28日（日）

【場所】

香港日本人商工会議所 Tower535-9F（最寄り駅：MTR Causeway Bay）

【プレゼンター】

柳生政一

【プレゼンター経歴】

香港日本人商工会議所／香港日本人倶楽部事務局長

1952年 岡山県岡山市出身。

1974年早稲田大学商学部卒業、同年伊藤忠商事株式会社（保険部）に入社。

1976年ニューヨーク、ロンドンにて保険ブローカー実務研修を経て、79年同社本社の保険ブローカー事業会社 Cosmos Services Co. Ltd., Hong Kong に初代マネージャーとして出向。

1995年日本へ帰国し、保険事業会社出向を経て本社の保険部門企画統轄部署を経験。1998年にはロイズ保険ブローカーの Cosmos Jardine (Europe) Ltd., London マネージングディレクター就任。2003年同社本社で海上保険部長に就任。2007年三度目の香港渡航。同本社中国金融・不動産・保険・物流グループ長を務める。

2011年伊藤忠商事を退社。香港日本人商工会議所・日本人倶楽部事務局長に就任。

【香港でのビジネス】

今回、柳生氏の話の内容は多岐にわたった。例えば香港における日系企業のビジネスの話から今回の香港研修中にも起きていた大規模デモ、さらには今後国際人として活躍していくための心構えや香港で食べるべきグルメの話である。本稿ではそれらの内容のうち自身の興味・関心を持った香港でのビジネスと今後に活かしたい教訓を中心にまとめる。

まず、香港における日系企業のビジネスについての話を述べる。香港は日本企業においても重要なビジネス拠点である。その理由として金融面が発達している点や基本税率が16.5%である点がある。この数字はシンガポールや台湾の17%とともに、アジアで最も低い部類にある法人税率になる。しかし、香港にはそういったビジネスに有利な点ばかりでなく高地価の問題がある。香港の不動産価格は、中国で暴動が起きた際に不動産価格が暴落して以降約50年間上昇し続けている。そのため香港の賃料は非常に高い。結果、販売管理費

が上昇するため営業利益が低くなりやすい。このような高地価の問題があるため、香港で生き残っている企業は不動産を所有している場合が多い。その代表例が丸紅やそごうである。逆に香港での土地購入を渋った結果、今現在において撤退ないしは苦しい状況に置かれている企業もあることを聞いた。しかしながら、不動産を購入・所有するという判断は非常に困難だったであろうことは想像に難くない。現在、香港で土地を購入することは非常に難しい。すなわち、現在、香港で土地を所有している企業はかつての責任者が香港での土地購入を決断したわけである。今になってみるとその土地購入は英断であったことがわかるものの、当時においては保守的な判断をとる方が易しかったであろう。土地を購入せずに賃貸のままに判断をとる方が会社にとっても、自身の評価についても、リスクは少ないように思われるからだ。このことから優秀なビジネスマンは先を読む力と難しい判断を実行する勇気が必要であると感じた。

しばしばTVなどの伝聞情報をもとに判断を下しやすい。しかしそういった表面的な情報だけでなく自分の中で専門を持ち、実体験に基づいて具体的なストーリーを持つことで人間としての違いが出る。もちろん、数字などのデータを頭に入れることで、相場観をつかむことも大切である。しかし、世界で活躍することを目指すのであれば各国の事情を肌感覚で学ぶことが肝要だ。つまり、インプットだけでなく実体験をもって学ぶことが重要なのである。知識と経験はそれぞれ車輪のようなもので片輪だけあっても上手く進めない。両輪そろってはじめて、自分の行きたい道へと進むことができるということなのであろう。柳生氏からはこのように幅広く興味深い話を聞いた。私自身、知識・経験量ともに増やし自分のストーリーの密度を上げる必要性を改めて感じた。今後の自身の生活に柳生氏の教訓を活かしていきたい。



後列・左から4番目が柳生氏

参考資料 2019/8/30 閲覧

- ・ 香港日本人商工会議所ホームページ <https://www.hkjcci-new.com/>
- ・ 檜橋里彩レポート「世界を席卷 ASIAN 旋風 vol.35」 柳生政一 前編
http://www.trade-trade.jp/nararisa/asian_senpu/vol35/index_2.html
- ・ 日本経済新聞「香港、法人税率 8.25%に半減、課税所得 2800 万円まで 行政長官演説、中小企業振興に目配り」(2017/10/11)
<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO22127270R11C17A0FF1000/>

ビジネス研修の概要

栗田 寛樹

Job Shadowing がテーマの今年のビジネス研修。字面通り影のように現場で働く人について回る企業もあれば、社員の方から仕事を任せられ実際に業務を行う企業、はたまた遠くの地で街頭調査を行う企業まで、それぞれの訪問先の企業によって多種多様な学びができた研修だった。そんな今年は12名の参加者が希望に沿って2名ずつ割り振られ、かね善・ヤクルト・City Super・ChoEi・日立製作所・ABC Cooking Studioの6社で3日間に渡って研修を受けた。

研修内容は企業によって異なり、朝それぞれのオフィスに集合した後昼食を挟んで夕方まで7-8時間ほど研修を行う企業が多かった。3日目の研修はどこも台風の影響で昼過ぎには終了したが、翌日の研修報告会では、どのグループからも内容のつまったプレゼンが行われ、非常に充実した研修であったことが窺い知れた。

仕事の現場や工場見学での気づき、ビジネス・ノウハウの獲得、語学力の向上、パワーポイントの見栄えの改善法、アンケート調査での精神面での鍛錬など、訪問先での研修内容によって学びはそれぞれであったが、いずれにとっても有意義な経験だった。

今回訪問した6社



各企業でのビジネス研修

Job Shadowing at Hitachi, Ltd.

経済学部 4年 栗田寛樹 社会学部 2年 井上菜緒子

《日立製作所について》

〈会社概要〉

<https://www.hitachi.co.jp/about/corporate/hitachi/index.html>

商号	株式会社 日立製作所 Hitachi, Ltd.
設立年月日	大正 9 年(1920 年)2 月 1 日 [創業 : 明治 43 年(1910 年)]
資本金	458,790 百万円※
従業員数	33,490 名※
連結従業員数	295,941 名※
売上高	1,927,241 百万円
連結売上収益	9,480,619 百万円

※ 2019 年 3 月末日現在

〈事業沿革〉

https://www.hitachi.co.jp/about/corporate/jp_Outline_2018-2019.pdf

・ OT・プロダクト展開 (1910 年代～)

コンピューター、ビット DRAM、テクニカル・サーバ、ストレージ・システム、ウェアラブル・センサー、ATM、液晶ディスプレイ、指静脈認証、対話型ロボット

・ IT 展開 (1960 年代～)

モーター、水電解槽、大型電気機関車、電気冷蔵庫、電子顕微鏡、カラーテレビ、列車管理システム、大型ポンプ、新幹線、エレベーター、原子力発電所、癌治療システム

・ IoT 展開 (2010 年代～)

「Lumada」を立ち上げ、事業を開始

《香港支社について》

<http://www.hitachi.com.hk/eng/about/hitachi/hongkong/index.html>


・ 1964 年に設立

・ 消費者向け家電部門・インフラ部門・ハイテク製品部門・国際調達部門の四本柱で事業

・ 20 以上の支社があり、従業員数は 1,500 人超、売上高は年間約 400 万米ドル

《研修の流れ》

〈スケジュール〉

Day1	Day2	Day3
<ul style="list-style-type: none"> ◆ Introduction of Hitachi's business in China & HK ◆ Office tour (Office, Innovation Center) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ Conducting 1st survey (in Thim Sha Tsui) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ Summarizing the result of survey ◆ Final Presentation
<ul style="list-style-type: none"> ◆ Welcome lunch 		<ul style="list-style-type: none"> ◆ Farewell lunch
<ul style="list-style-type: none"> ◆ Finalizing the survey questionnaire 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ Introduction of "HK Business Promotion Office" ◆ Conducting 2nd survey (in Central) 	
	<ul style="list-style-type: none"> ◆ Sight-seeing tour 	

〈事前準備・課題〉

- ・ アンケート調査の質問項目を作成

背景：Hitachi は近年 Social Innovation Business に注力している

香港事情：現地の人は日本の技術力に信頼感を持っているはずである

希望：そうした香港人の意見を今回のアンケート調査で取り入れたい

(課題は去年と同じだった)

- ・ 作成したアンケート (仮)

所要時間：3時間程度

質問項目：(全て回答形式は「Yes / No」)

- ・ Do you think promoting "Smart city" contributes to people's well-being?
- ・ Do you have any convenience in your daily life in Hong Kong?
- ・ Do you have any inconvenience in your daily life in Hong Kong?
- ・ Do you have a good impression about Japanese electric devices?
- ・ Do you think the word "Smart-city" is popular for you and people in Hong Kong?

〈Day 1〉

- ・ 初訪問

初日の集合時間は9:30だった。場所は Hong Kong Science Park にあるオフィスのロビー。幸いにも Science Park は中文大学のすぐ裏にあったので、所要時間は大学駅から2階

建てバスでわずか 5-6 分、そして徒歩 10 分程度だ。当初かなり時間に余裕を持って Science Park 内には到着したが、あまりにも広すぎるのと方向感覚が乏しく迷ってしまった。激しい雨が降る中、(井上は濡れたピカピカの敷石で滑って尻餅をつきスマホ画面を割ったりしながらも)、さまよって結局時間ギリギリの 9:28 に到着した。

そしてロビーで落ち合うはずの Cindy さんを探すが見つからない。だいぶ待ったが会えず、電話も通じず焦りが募る。セキュリティーが厳重でエレベーターに乗ることもできず挙動不審状態だったところ、気にしてくれていた 1 階の受付のお姉さんに連絡を取ってもらい、10 時前過ぎにゲートをやっと通してもらえた(結局この受付のお姉さんとは 3 日とも顔を合わせ、仲良くなれた)。

・社員の方々

無事ゲートを通りエレベーターを上がってオフィスへ。受付で名前を告げると、快く向かい入れてもらった。そして側でコーヒーを飲んでいた社員の方とも挨拶。名前を聞くと彼女が Cindy さんだった。どうやらロビーで落ち合うことは知らなかったらしい。しかし、とても明るく親切な方で、早速彼女オススメのコーヒーもいただいた。他にも通りかかる社員の方々は皆親しげに話してくださり、初日からアットホームなオフィスの雰囲気を感じることができた。そして最後に 3 日間お世話になる Andy さんにご挨拶。香港生まれ香港育ちの大変優しく、気さくな方だった。

・オフィス環境

前述の通り、オフィスは Science Park と呼ばれる科学産業に関連する企業のオフィス団地内にあるので、社会人の方が多く賑わっていた。独特な形をした会議スペースや膨大なオフィスのほか、カフェや公園等リラックスできるスペースや、レストランも数多くあった。世界的な大企業からスタートアップまで入っている、香港政府肝いりの地域だ。

・ Introduction of Hitachi's business in China & HK

初日、最初のアクティビティは Andy さんによる会社紹介だった。香港や中国への進出の歴史、時代ごとの主力製品の違い、また近年日立が IoT や世界進出に注力していることを学んだが、事業の規模感や予算、また進出した年代を耳にして改めて日立製作所の存在感の大きさを思い知らされた。

・ Office tour (Office, Innovation Center)

そして、そのままオフィス内部の見学へ。テラスから Science Park を見渡すと、自然と技術が調和したような近未来的な空間の中にたくさんの建物が並んでおり、香港の勢いを感じさせるようであった。イノベーション・センターでは実際に開発している温度検知センサーや、中国で実際に運用されている高齢者の見守りシステム等をリアルタイムで見せていただいた。身近な現実の中に実際に技術が介入している様子を目にすることができた。

・ Welcome lunch

見学後は Andy さんと私たちに、日本人社員の方々 2 名を合わせた 5 名で昼食をとった。Welcome Lunch ということで結婚式のイベントが行われることもあるレストランで飲茶を

ご馳走になった。どれも美味だったが、特にエビシューマイと、デザートのマングー・プリンは絶品だった。また、社員の方々が入社後に勉強し始めた広東語を普通に使いこなしているのを見て、言葉を話す機会の重要性を認識した。

・ Finalizing the survey questionnaire

午後は事前準備の確認だった。Andyさんは概ね褒めてくださったが、いただいたアドバイスを踏まえて一部変更した結果、下記のようなアンケートが完成し、1日目は午後3時ごろには終了した。

・ 修正版アンケート（完）※報告書用に形式は適宜修正

A Questionnaire about Smart City developments in HK

We are the students from a university in Tokyo, studying at CUHK this summer. A company in Japan is now looking for the way to promote Social Innovation Business by its technology. We would like to know your opinions about Smart City and Japanese technology. I appreciate your cooperation. 多谢！

◆ Do you know the word "Smart City"? : Yes / No

If "Yes"→

◆ Do you think the word "Smart-city" is popular with Hong Konger? : Yes / No

◆ Do you know "the Smart City Blueprint" developed by the government? : Yes / No

◆ Do you think promoting "Smart City" contributes to your well-being? : Yes / No

◆ How much do you satisfied with the convenience in your daily life? (1 – 5)

5 (Totally satisfied) ~ 1 (Completely unsatisfied)

◆ Which country's technology do Hong Konger need the most? : _____

◆ What kind of impression do you have about Japanese technology? : _____

〈Day 2〉

・ Conducting 1st survey (in Thim Sha Tsui)

この日は前日完成したアンケートを印刷して、Thim Sha Tsuiに出向いた。アンケート対象者は香港人で英語の理解できる人（アンケートが英語なので）。昨年は28人に声かけして28人全員から回答を得られたとの情報があったので、今回のノルマ20人は軽く越えようという意気込みで臨んだ。Thim Sha Tsuiに着いて、作戦を練ってアンケート対象者の多そうな区域を選択し、声かけを始めたのだが、誰も答えてくれない。声かけしても、すごく難しそう顔をして足早に避けて通り過ぎるだけ。正直しんどかった。結果は回答者1人。30人に声をかけて午前中+ランチの時間まで削って集めた結果だった。

・ Introduction of “HK Business Promotion Office”

午後は Andy さんのもとへ向かい、まず午前中の残念な知らせを伝えた。すると驚いてはいたものの、意気消沈している私たちを見て、スケジュールを変更、夕方一緒にアンケート調査に出向いてくれるとのことだった。そこで、簡単に Andy さんの部署である HK Business Promotion Office を紹介していただいた。今回のアンケート調査に代表されるように、主なミッションは日本の技術と、香港に住む人々を繋げることだそうだ。

・ Conducting 2nd survey (in Central)

午後の予定を早めに切り上げると、Andy さんと私たちは Central 駅に向かった。道中ではいつも都心に行くときに使う MTR だけでなく、途中街並みを見せるためにバスも使うルートで連れて行っていただいた。その途中でも親しげにコミュニケーションを取ってくださったので、午前中で意気消沈していた私たちは大変励まされた。現地に着くと、もう午前中のように、作戦もターゲットを絞るプロセスもなかった。Andy さんが率先してただ道行く人の前に立ち塞がってお願いして下さる。もし、協力的なら僕たちが駆け寄ってアンケートを手渡す。この方法で、それでも回答率は 40%ほどであったが、30 分ほどでなんとか 18 人分の回答を集めることができた。もう一度同じことをやれと言われても、まだできる気はしないが、ただ目的に向け一心不乱に取り組むことの強さと重要性を久しぶりに実感した。

・ Sight-seeing tour

そしてアンケート調査後は、Andy さんによる Central ツアーであった。Central 周辺を歩きながら孫文や工商銀行、戦争の歴史を学び、ミシュランを 9 年連続で受賞しているレストランで裏メニューのゴマだれ空心菜とエビシューマイの乗った麺もご馳走になった。

〈Day 3〉

・ Summarizing the result of survey & Final Presentation

最終日の 3 日目は台風の警報が出されていたため、プログラムは大幅に短縮になった。着くとすぐに、前日のアンケート結果を集計し、3 日間の学びをまとめたスライドを作成して Andy さんにプレゼンした。内容はまずまずだったようで、アンケート調査の失敗にも関わらず今回作成した資料を今度社内でも取り上げると言っていたのが嬉しかった。

・ Farewell lunch

最後はタクシーで大学駅まで同行していただき、周辺でランチを食べた。別れの時まで、私たちに親身になって人生のアドバイスをしてく下さる姿勢は、とても印象的だった。今回の研修で日立製作所を訪問できたことに感謝したいと思う。

《まとめ》

総じて大変よくしていただいた甘いパートと、非常にタフなアンケート調査で精神面が非常に鍛えられたハードなパートの入り混じった、飴と鞭研修であった。しかし、だからこそオンオフを持って研修に取り組めたし、社員の方や相方の様々な一面を知ることができた。Andy さんを始め、快く研修を受け入れ、学びを最大限にしようと努めてくださった社員の方々に深く感謝したい。これからを生き抜く上ではいただいたアドバイスの中の、“Always be considerate about people involved, background, and what you want to do” “Keep doing & Continue changing” という2つを胸に抱いていこうと思う。(栗田)

日本でも全くやったことがない街頭調査を、見知らぬ土地でしかも英語でやるという貴重な体験ができた。比較的スムーズだった(と聞いてきた)去年の街頭調査と比べ、1度目のアンケート調査では全く成果が出せずショックだったが、アンケート調査を行う場所・対象者を選ぶ重要性を知ることができ、振り返ると総じて良い経験ができたと思う。Andy さんは非常に気さくに接しながらも、一大学生である私たちに丁寧に向き合い様々な教訓を伝えて下さり、また仕事内容に誇りを持って取り組んでおられる姿は心に響くものがあった。また、お楽しみパートでは様々なものをご馳走になったり、高層ビル群のすぐ下に広がる、対照的な香港の歴史地区を案内していただけた。さらに、相方の栗田さんがとても手際よくプレゼンやアンケート調査の準備をしながら、英語で流暢に質疑応答している姿を見て成長しなければと強く感じた。Andy さんをはじめとする社員の方々、また栗田さんに深く感謝します。(井上)



Science Park の街並み



主にいた会議スペース with コーヒー



Sightseeing tour で訪れた歴史地区



おいしかったエビワンタンと空心菜

Job Shadowing at ABC Cooking Studio

経営管理 1 年 田村草太 社会学部 2 年 石井遥菜

本稿では、ABC Cooking Studio（以下 ABC）について Job Shadowing で学んだことや実際に Job Shadowing で体験したことを中心に述べていく。本稿の構成として、まず ABC という企業について田丸氏からうかがった話をもとに説明と考察を行う。その次に ABC の Job Shadowing で具体的に行ったことやその活動の振り返りを行う。

1. 企業情報

ABC について代表者の田丸氏からうかがった話や参考資料から説明をしたい。ABC は 1987 年 4 月に設立された会社で、料理教室事業を主要事業としている。スタッフ数は国内だけでも 4,091 名、スタジオ数は現在 164 スタジオで、そのうち国内 127 スタジオ、海外に 37 スタジオある。なお香港にはスタジオが 3 つ存在し、そのうち日本でいうところの渋谷と似たような場所である中環（セントラル）PMQ 店で研修を受けた。

もともと ABC は、静岡県で食器・調理器の販売を行っていた会社であった。しかし食器・調理器の販売は芳しくなかった。販売不振の原因として、主婦の中に料理を上手くできない人たちが多くいることに気づいた創業者の横井哲之氏は、1985 年に食器などの販売店を併設した料理教室を開講するようになった。料理教室に商機を見出した同社は、今日、日本だけでなく海外にも多数の教室を持ち、企業理念である「世界中に笑顔のあふれる食卓を」を実践している。

2. 企業の特徴

現在、世界に多数の教室を展開し成功を収めている ABC は、他の料理教室と異なる特徴を持っている。ABC 以外の料理教室は個人で行う、もしくは Panasonic や HITACHI といった家電メーカーが片手間で行うことが多い。この家電メーカーが行う料理教室は、儲けようというより、製品の宣伝をする意味合いが強い。一方で ABC は他社とは異なり、料理教室を主力事業として行っているため、他の料理教室との差別化を徹底的に図っている。

そのような差別化を図るために、同社の料理教室には大きく 4 つの特徴がある。1 つ目は、ガラス張りのスタジオである。同社の料理教室はステージのように外からも注目されるつくりになっている。2 つ目は、少人数のレッスンである。料理教室は一般的に 10 人や 20 人などの比較的大人数で行われることが多い。しかし ABC は海外だと講師 1 人につき受講生 4 人、国内だと講師 1 人につき受講生 5 人と少人数になっている。3 つ目は、オリジナルレシピの積極的な開発である。Instagram や Twitter といった SNS ツールが増えた今日においては、写真に撮って目で見ても美味しい料理の存在が重要である。そんな話題性のある華やかな見た目と、家に帰っても再現することができる簡単なレシピの開発にも同社は力

を入れている。またこのレシピは、様々な国の人も一様に作り方を理解できるように、絵で簡単に理解できるという工夫もされている。最後の特徴は受講生がフレキシブルに時間と場所の選択をできることである。同社は、世界中にスタジオを展開しているためグローバル通学制度を設けている。このため旅行先や転勤先でも比較的通いやすくなっている。

3. ABC のターゲットセグメントと 4P

以上で述べた同社の特徴は、同社が設定するターゲットセグメントを意識したものとなっている。同社がメインに据えるメインターゲットは F1 層である。F1 層とは 20~34 歳の女性を指す。この層は一般的にトレンドに敏感で消費意欲が高い層とされる。このような流行を好み、自分磨きのための支出を多くする傾向がある世代をターゲットに据えた同社の Product は料理教室という教育サービスである。その商品を届けるための Place として都心のアクセスのよい場所に料理教室を設けている。特に、商業施設の中に料理教室を開講したのは ABC が初である。このときの場所は、大宮ロフトである。次に商品の存在や特徴を知らせるための Promotion は店舗自体が担っている。前節の 2. 企業の特徴でも述べたように、ABC は全面ガラス張りの非常に目立つ構造になっている。これは単に目立つだけでなく、料理している様子が外からも見て分かるようになっているため、教室自体が広告であり宣伝の役割を果たしている。そのため、ABC には広告宣伝費が一切ない。この店舗の仕組みは販売管理費を抑えることにも貢献している。最後に Price は、メインターゲットや他の要素を考慮し高く設定している。価格は安ければよいというわけではない。ある程度高級路線を意識し、その分教室自体の質を高めることで顧客の満足度を高めている。

4P	B to C事業においてABCがとるMM
Product (製品・サービス)	料理教室、体験型メディア
Place (流通)	都心。とくに商業施設の中に入ったのはABCが初。(大宮ロフト)
Promotion (販売促進)	広告宣伝費は一切なし。そのためお店自体が広告を兼ねている。
Price (価格)	ターゲットの特徴から高級路線を意識しているため高めに設定し質を高める。

本研修を参考に作成した当社料理教室事業の 4P 分析。

MM はマーケティング・ミックスの略。

4. ABC の今後

以上のように、料理教室事業で成功を取めた同社であるものの、今後更なる成長をするためには、多角化が必要になる。現に主要となる消費者向けの料理教室事業から得た顧客データやノウハウを B to B 事業（法人営業）へ転用し、利益率の高い事業へ多角化を図っている。現在、法人営業は全体の売上の 1 割ではあるものの利益率が非常に高く、徐々に売上自体も伸びつつある。今後も会社の主要事業である料理教室から得た経営資源をもとに利益率の高い法人営業に力を入れていくのではないかと考えられる。

今回我々が研修を受けた部署も法人営業部である。そんな法人営業部での体験について以下に記述していく。

5. Job Shadowing の概要

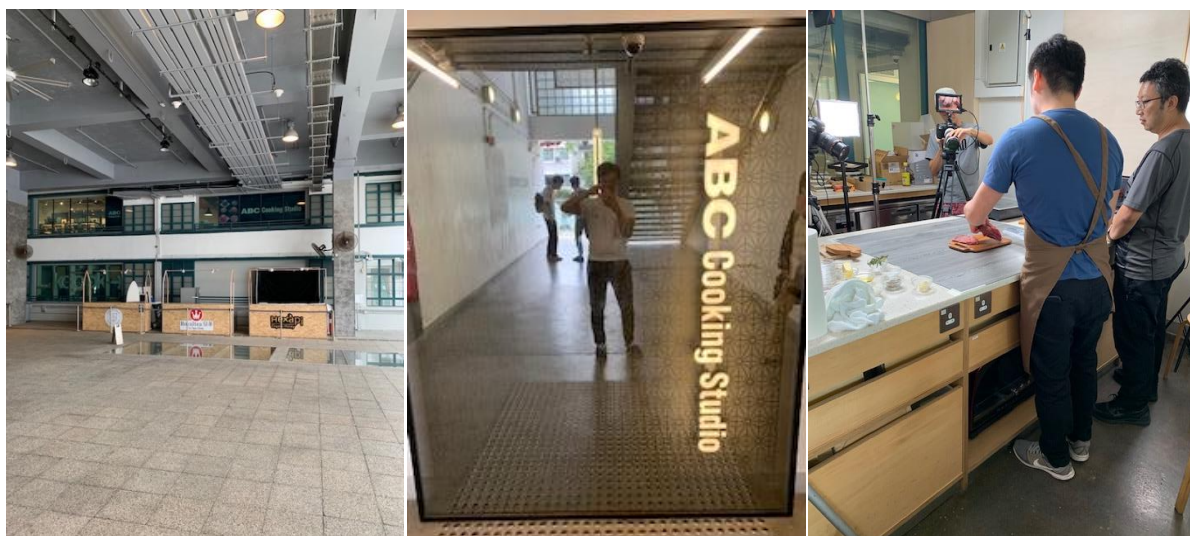
私たちは三日間を通して主にクライアント向けの報告書作成を行った。京都府の京野菜販売レポートと福井県の PR 活動レポートを、それぞれパワーポイントで作成した。

一日目は、10 時にスタジオに到着すると社員の方がスタジオ内を案内してくださった。その後、代表の田丸さんと LINE ビデオ通話にて打ち合わせをし、会社概要についてもうかがった。その日は、YATA というスーパーマーケットの依頼を受けて動画撮影をおこなっており、そちらを 1 時間程見学させていただいた。YATA の食材を使用してクッキング動画を製作し、YATA の食材を PR するという趣旨のものである。13 時半頃になると、ランチタイムだということで、社員のお二人が香港では有名なラーメンや定食がいただけるお店に連れて行ってくださった。そこで日本と香港の文化の違いや香港でオススメのお店など教えていただいた。オフィスに戻ってからひたすら報告書作成にあたり、分からない点があれば、それぞれ担当の社員にアドバイスをいただきながら進めるという形であった。この日は 17 時に退社した。

二日目も同じく 10 時に出社した。この日は一日中報告書を作成していた。この日は田丸さんに初めてお会いした日である。とても明るく、はきはきと喋る印象で私たちの質問に丁寧に答えてくださった。お昼には、社員とアルバイトの方全員とで飲茶をご馳走になった。本格的な飲茶を堪能したのはもちろん、田丸さんをはじめとする ABC の方々と座ってゆっくりお話しする貴重な時間となった。オフィスに戻ってから報告書作成の続きに取り掛かり、同じく 17 時に退社した。

三日目も 10 時に出社し、前日と同じ業務内容の予定であった。しかし、台風の影響で 12 時頃には全員退社という運びになった。時間ぎりぎりまで報告書作成にあたり、未完成ではあったものの、田丸さんからそれぞれフィードバックをいただいて終了した。

以下は中環（セントラル）PMQ 店の写真。



スタジオ外観

スタジオ入り口

YATA 撮影の様子

6. パワーポイントの作成に関して

この Job Shadowing において報告書作成が大半を占めていたが、その内容と最後に田丸さんからいただいたフィードバックに関して述べたい。まず初めに、ビジュアル面に関するアドバイスをいただいた。写真のサイズをミリ単位でそろえることと、写真サイズを変えた際には、写真がゆがまないように配慮することである。私は大雑把な性格であるため、ここまでするのかと驚いたが、イベントの内容をより正確に伝えてクライアントに満足してもらうためには、当たり前なことだと気づかされた。更に、SNS 発信の成果を記すために発信を行うインフルエンサーのフォロワー数や投稿の「いいね！」数、コメント数まで明記するよう教えていただいた。前述のように ABC は F1 層をターゲットしている。F1 層はトレンドに敏感な 20～34 歳の女性ということで、言うまでもなく SNS を基盤とした宣伝と

口コミが非常に効果的である。そういった事情が報告書作成にも繋がっていた。



左図に田村が本研修中に作成した資料の一部（表紙）を抜粋した。この表紙には、いくつかの問題がある。もちろんセンスが悪いといわれればそれまでなのだが、一番大きな問題は画像の大きさが統一されていないことである。また、画像の縮尺がもともとの縮尺と比較して正

確ではない点も問題である。

7. 考察

ABC で三日間お世話になり一番印象的だったのは、アルバイト社員を含めて香港の方が大半を占めているのにもかかわらず、日本語で会話をしていたことである。ABC の方は、全員日本語がお上手でABCにいるときだけは、まるで日本にいるような心地がした。更に、ABC はとてもアットホームで、社員、アルバイトに関わらず自由に意見できる環境であったと思う。右も左も分からない私たちに優しく指導して下さったABCの皆さんに感謝したい。(石井)

大学院に入ってからパワーポイントでの資料作成が多く、資料作成の経験がほとんどない私は、その技量が未熟で困っていた。丁度そんなときに、このような機会をいただいたことは幸運であった。私が現在大学院での生活で感じることの1つは、資料作成がプレゼンなどの際に大いに役立つため、社会人だけでなく学生にとっても必要性が非常に高いスキルであるということだ。プレゼン自体は様々な場面で行われる。しかし、語り方や場の雰囲気づくりといった説明する人間にのみ焦点があたることが多い。勿論そういったトーク術は重要な要素の一つであるものの、プレゼンは口だけで説明するわけではない。ゆえに分かりやすい口頭での説明だけでなく、わかりやすい視覚情報を届けなければならない。資料作成のような基本的な前準備の必要性和重要性を再認識した良い研修だった。私の拙い技術で作った資料に様々なアドバイスをくださっただけでなく、いろんな場面で優しくお声がけしてくれたABCの方々には感謝の意を表したい。(田村)

Job Shadowing at City Super

法学部 2 年 山口悠作 商学部 1 年 林穂高

(研修内容)

City Super は、1996 年に石川正志さんによって、タイムズスクエアに創設された高級スーパーである。コンセプトは Mega Lifestyle Specialty Store。2018 年の時点で香港に 21、上海と台湾にそれぞれ 7 店舗を運営している。こちらでの研修はほとんどが英語で行われた。

〈初日〉

10:00 尖沙咀 (チムサーチョイ) 駅から少し歩いたところにあるハーバーシティーというビルの中に City Super とそのオフィスがある。オフィスに着いて社員の方々と挨拶をした後、City Super の歴史や経営理念について学んだ。

11:30 City Super の店内をオーナーの商品説明を受けながら回った。

12:30 同じ建物内にある高級な香港料理レストランで社員の方々と食事をした。

14:00-17:00 Store Attachment という店員のレジ打ちのお手伝いをし、お客さんに挨拶をし、袋を取り出して商品を入れる作業をした。

〈二日目〉

10:00 QA introduction

11:00 Buying Concept

12:00  で昼食をとった。

13:30 Supply Chain

15:00 Log-On でおもちゃの箱の梱包をした。

〈三日目〉

10:00 沙田 (シャータイン) の City Super に行った。

11:30 日本式の庶民的スーパーの一田 (ヤッタ) に行った。

その後、台風の影響で予定されていたプレゼンテーションが延期されて寮に戻った。

〈ヤクルト工場見学の後〉

尖沙咀の City Super のオフィスで EPS (Environment, Product, Service) について City Super と日本の高級スーパーの間で比較したプレゼンテーションを行った。

以下で山口と林のプレゼンテーションについて、それぞれ述べていく。

〈プレゼンテーション 山口〉

日進ワールドデリカテッセンを比較対象に選んだ。日進ワールドデリカテッセンはあま

り知られていないと思うが、数多くの大使館がある麻布十番にあり、外国人の富裕層が訪れる超高級スーパーである。70%が外国人のお客さんであり、世界のあらゆる種類の食材を取りそろえ、英語にも対応している。私もプレゼンの準備をするまで名前すら知らなかった。



←メロンの上にハムをのせて食べる。香港人もよくこうするらしい。
→日進ワールドデリカテッセン



	City Super	日進ワールドデリカテッセン
Environment	<ul style="list-style-type: none"> ・店内で売っている食材を使った料理を提供するスペースがある。 ・一見関係ない食材が隣に並んでいる。例えば、メロンとハム。イタリアには一緒に食べる文化があるとか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・海産物が空気にさらされておらず、衛生的。
Product	<ul style="list-style-type: none"> ・一部の商品の近くに、商品にまつわる小話を書いてある。 ・City Super ブランドを全面に押し出した商品の販売。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ハラルフードがある。ワニやウサギの肉など City Super よりも品種が豊富。 ・店内の食材フロアと同じ規模の酒類エリアがある。
Service	<ul style="list-style-type: none"> ・各部門のフードアドバイザーがいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本式の接客はやはり丁寧。

(City Super への提案)

1. イスラム教徒が食べることのできない材料を除いたハラル食品を提供するとより広い顧客層を獲得できる。
2. セルフレジ・カウンターを設置すれば会計の待機時間を減らすことができる。
3. 水産物は顧客と空気を介して触れないように陳列をする。

1に関しては、香港にはイスラム教徒が多くないのでハラル食品を提供するメリットがそこまでないそう。3に関しては、顧客が陳列されている水産物に近づいて新鮮さを確認してもらう意図があるとのこと。

〈考察 山口〉

City Super の経営体制について何度か講義を受けた。特に印象に残ったのが、食品の部門ごとに担当者がいて、周期的に担当者を交代し、最後には一人の担当者がすべての部門を経験した後にオーナーになるというシステムだ。上層部がスーパーの隅々まで精通していることを実感した。City Super の店内には、日本商品がとても多くあって驚いた。日本製ではないものにも、しばしばひらがなが書いてあって、日本ブランドが強く存在していることを実感した。実は、日本製品が多いのは City Super に限った話では無く、町中のコンビニにもたくさんの日本製品が売られていた。果物やお肉は特に高級な価格だった印象があるのだが、飛び抜けて高かったのが高級な酒類だ。私のような庶民の感覚とはあまりにもかけ離れた値段設定で、さすが高級スーパーだなと思った。また、オーナーの方にチーズと牡蠣を試食させていただいた。高級スーパーの名にふさわしい味だったのを覚えている。その後社員の方に、ありがたいことに高級香港料理レストランで昼食をごちそういただき、会話をしながら食事を楽しんだ。社員の方々は日本に興味をもっていらっしやって、こちらが日本の言葉や文化、観光などを紹介する代わりに香港の文化を教えていただいた。レジの店員のお手伝いもして、お客さんに挨拶をして、袋に商品と氷を詰める仕事をした。高級スーパーとはいえど、高級肉や高級ワインなどを買うお客さんは、私が働いた 3 時間の間では見られなかった。インスタント食品を買っていくお客さんも多かったのも、いわゆる庶民層も利用していることが予測される。お手伝いをした 50 代くらいの女性店員の方は辛うじて英語を話すことができたが、広東語独特の訛りが強くて聞き取りにくかった。お客さんが来なくて暇なときは、広東語で数の数え方を教えてもらった。また、Log-On の Store Attachment では店員が互いに軽い悪口を言ってじゃれ合うくらい仲が良かったのが印象的で、このような職場が世の中に増えれば良いなと感じた。

〈プレゼンテーション 林〉

私は EPS (environment, product, service) という考え方をういた City Super と日本のハイエンド・スーパーマーケットの比較に「成城石井」を選んだ。成城石井は 1976 年に創業したハイエンド・スーパーマーケットの一社で総店舗数は 174 である。成城石井というと駅の中にあるというイメージしかなかったが、ワインバーなども経営していた。また、desica というオリジナルブランドも持っており、そういった点でも Log-On という雑貨ブランドを持つ City Super と似ていると思ったため、比較の対象とした。



City Super の魚介売り場



比較対象の成城石井



Environment

・ City Super & 成城石井

どちらも店内が整頓されており、棚や商品の配列までとてもきれいに行われていた。

Product

・ City Super

より海外の商品の割合が高かった。日本人から東欧の人までさまざまな人が来ることに対応しているのだと思う。また **Promotion area** があり、季節による商品などが多く販売されている。

・ 成城石井

City Super のように店内で商品を買って調理までできるようにはなっていない。おそらく駅構内にある店舗などもあり、スペースが足りないことが原因だと思われる。

Service

・ City Super

それぞれのコーナーに担当の方がいて商品についておすすめできるようになっていた。また英語版のホームページにも多くの情報が載っていた。

提案として「セルフレジやフロアマップの導入」を行った。環境面では、先生からどちらのスーパーも一般的な店と違い、照明が優しいという指摘をいただき、なるほどと感じた。お客さんが買い物しやすいことを最優先にするところが、ハイエンド・スーパーマーケットの特徴の1つだと感じた。

〈考察 林〉

香港という未知の土地で、ハイエンド・スーパーマーケットという学生にはあまり関わりのない企業で **job shadowing** を行い、とても貴重な体験ができた。また **Store attachment** など、実際の現場で現地の方と関わることもでき、とても有意義な研修であったと思う。

今回の研修を通して学んだことは主に二つある。1つは仕事の重み、大切さである。研修では講義を受けることもあり、インターンシップのようなものを予想していたため、初めのうちは、もっと企業で実際に働くようなことを経験してみたいと思っていた。しかし、話を

聞き、担当してくださる方の様子を見ているうちに、とても私たち学生に気を遣っていただいていることに気がついた。本来 3 日間の研修という、そのあまりの短さから研修というよりは企業見学というほうが正しいだろう。しかも香港の企業であるため、事前に他の企業と比較することやその会社の実績の詳細を知ることなどは難しく、言葉も通じない。またハイエンド・スーパーマーケットという形をとる以上、企業について知らない学生を仮とはいえ、お客さんの前で長時間働かせることは難しい。そういった状況では、満足に働けないことが分かっていたため、講義などで企業について学びながらも **Store attachment** で働くことも含んだ研修にさせていただいたのだと気づいた。講義を通して、各部署の仕事の難しさや大切さも学んだが、学生に無責任に仕事をさせないところや、担当の方が自身の仕事もこなしつつ、難しいところなどを丁寧に教えてくださったところからも、仕事の重大さに気がつき、仕事というものについて深く考えるきっかけとなった。

もう一つは、語学力の大切さである。ほとんどが英語で説明されるなかで、日常会話や業務説明となると意外と普段よりもできないと言うことに気がついた。日本語、母国語であれば小さな声でも聞き取ることができるし、話の流れや使う単語などもある程度知っているため、推測することができる。しかし英語となると、定石など知らないため推測することは難しく、話を聞くのに集中力がとても必要だった。また 2 日目の **Log-On** の **Store attachment** で店員から商品の梱包について説明を受けた時など、ほとんど中国語をつかって説明をされ、山口さんに通訳してもらった。店員の方もポケトークという翻訳機を使っていたが上手く翻訳できず、意思疎通できない場面があった。今後も翻訳機によつての会話はすぐにはできないと思われるため、英語はもちろん様々な言語をもっと勉強しようと考えた。

Job Shadowing at かね善

商学部 2年 馬場敦也 社会学部 2年 角田友佳子

私たちは三日間矩善香港食品有限公司で研修を受けた。三日間という短い期間ではあったが、かね善という会社のこと、海外で働くということ、海外で日本の中小企業が事業を行うということ、そして香港人の働き方等々、本当に様々なことを学ばんだ。

1. 矩善香港食品有限公司について

株式会社かね善は大阪に本社を置く流通会社であり、今回うかがった矩善香港食品有限公司（以下「かね善」とする）は香港に拠点を置く関連会社である（出典：<http://www.kanezen.com/about/company/>）。

社員は、日本人の岡田圭司マネージャー、香港人のディアスさん、ヴィクターさん、ユイさんの四名であり、香港人のインターン生、アンガスさん、ポニさんも含め、合計六名で仕事をされていた。



（図1の写真の右側六名が社員。左から三番目が岡田マネージャー）

図1 矩善香港食品有限公司のみなさん

かね善の業務内容を簡単に表すと以下のようになる。

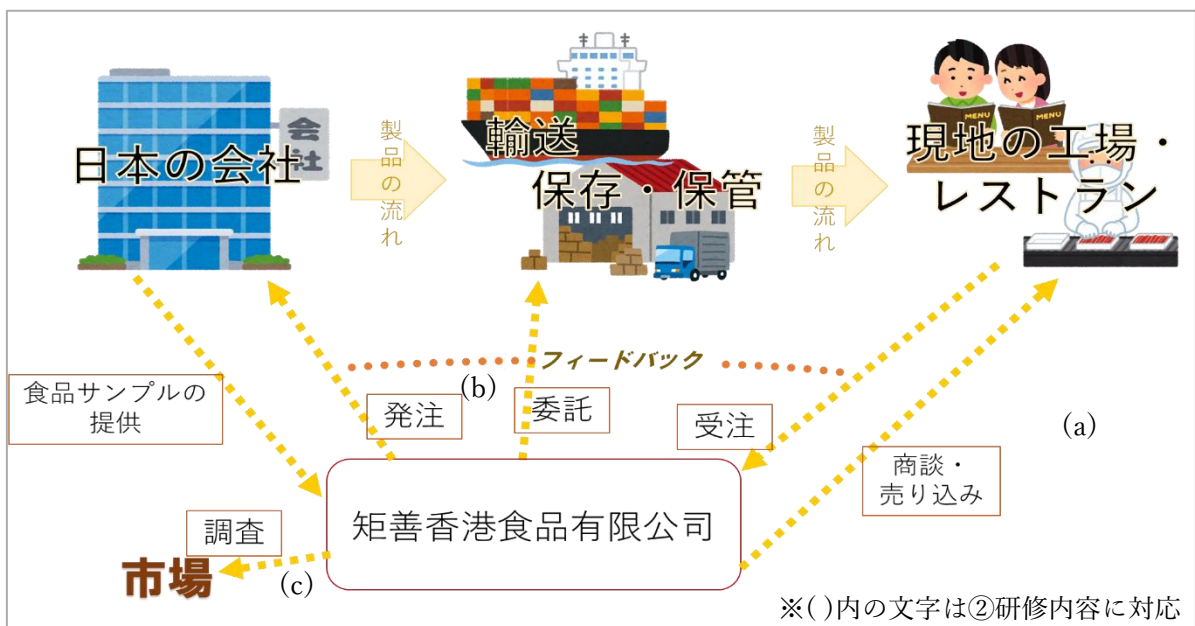


図2 かね善の業務（研修をもとに個人で作成）

かね善は主に黒豆や粉末出汁などの、加工品を扱っていた。また、大手企業のように部署に分かれているわけではないので、それぞれが自分に割り当てられた仕事だけをする(営業なら営業だけをするなど)のではなく、様々な業務を分担して行っていたことも印象的だった。様々な業務をこなせるようにするために資格を取る勉強をしている社員もいた。

2. 研修内容

商談見学、倉庫見学をさせてもらったほか、かね善で取り扱っている製品の説明を聞いたり、自分の地元の食品についてプレゼンを行ったりした。

(a) 商談見学

香港でケーキを販売するカフェ(日系企業)の工場にうかがった。7月下旬であったが、商談はクリスマスケーキのオーナメント(砂糖菓子のサンタのような飾りのこと)についてであった。

日本の一般的な工場は、いわゆる工業団地のように広く土地の安い場所や、輸送に便利な港湾部、主要道路のそば、駅の近くなどに立地する。しかし、今回うかがった工場は、ビルの一フロアにあった。鉄道輸送が発達せず、地価の高い香港ではよくある工場の形態らしく、印象的だった。

(b) 倉庫見学



図3 倉庫の様子

倉庫見学では、かね善が実際に利用している倉庫を見学した。こちらもビルの一フロアにあった。図2のようにかね善は輸送・保管を委託している。今回うかがった会社は香港に到着したコンテナから倉庫までの製品の輸送、そして倉庫での保管、倉庫から取引先への輸送を行っていた。倉庫には隙間なく各社の製品が積まれてあった。都会的な香港の印象とは異なり、機械化はあまり進んでいないように思われた。だが、貿易で発展する香港

の巨大な流通を体で感じた。非常に貴重な体験だった。

(c) 出身地の製品のプレゼン

初日には、社員に対し、自分の地元の食品についてプレゼンを行った。不慣れな英語でのプレゼンだったが、みなさん熱心に聞いてくださった。好評だったのは、リラックス効果や冷え解消効果などのあるチョコレートや、スパイスから作るカレーの料理キットなどであった。機能性のあるチョコは見たことがない、チョコを食べる理由が増える、とおっしゃっていたし、中身が見える透明なパッケージになっていたカレーのキットは、安全だと一目でわかり、また作る過程を楽しめる商品だとおっしゃっていた。香港の人は日本の食品に、機

能性や安全性、希少性を求めているのだと実感した。

3. 今回の研修で印象深かったこと

まず、社員の皆さんの優しさに本当に感謝している。みなさんは、かね善の業務内容にとどまらず、様々なことを伝えてくれ、我々の多くの質問に丁寧に答えてくれた。香港人の社員の方々は日本語を話せたので、たくさん話すことが出来た。香港とはどのような場所なのか、香港の人が日本にどのような印象を抱いているのか、自分なりに少しイメージができた。

また、日本の食品のブランド力も印象に残っている。これは、研修中にも感じたが、研修後にいった「フードエキスポ（世界の様々な地域の食べ物が食べられる、大規模な展示イベント。かね善も参加している）」で、日本のブースにたくさん人が集まっていた際にも感じた。ただ、商談見学でうかがった企業のケーキ開発担当の方が、「日本の食べ物は確かに人気があるが、香港人の舌には甘すぎることも多い。日本で販売するケーキのレシピを時には変えるなど、工夫を凝らしている」と話していた。海外で事業を展開する上で、特に青果などの一次産品ではなく、加工品を扱うような場合、日本の持つブランドと現地適応のバランスをよく考えねばならないのだと感じた。

日本と香港の違いに関しては、働き方・働く姿勢の違いが非常に印象深かった。ワーク/ライフバランスの考え方や職場の流動性に、その違いが顕著に表れていた。まず、香港の人は「ワーク（仕事）」よりも「ライフ（生活）」のほうを重要視する。日本のように退社後に自分の時間を潰してまで、上司に付き合うことには違和感を覚えるようだ。そして、転職をよく行う。日本であれば、賃金が多少高くとも、すぐに仕事を変えたりしないが、香港の人は賃金に非常に敏感で、すぐに転職を考えるらしい。私は、この原因は、継続性を重視して仕事が生生活の大部分を占める日本人が、伝統的に多いためである、と考える（最近では香港のような考え方をする人も増加しているとおもうが）。海外で働く上では、また外資系の企業などで働く上では、自分が当たり前と考えている働き方・働く姿勢を再考する必要があると感じた。同様に、海外で現地出身の部下を持った場合も、その国の働き方・働く姿勢について理解しなければならぬと学んだ。（馬場）

今回の研修を通して学んだことは、研修前に自分が想像していたよりもずっと多かった。自分が数年後大学を卒業して、どこかの会社で働くということに対して、はっきりとしたビジョンがあるわけでもなく、ましてや自分が働いていることを想像しようとしてもしっくりこない程、私にとって「社会人」というものは、ぼんやりとしていて遠い存在であったため、たった三日間の研修は、正直なんとなく、さっと終わってしまうのではないかと、という思いが自分の中にはあった。しかしかね善で三日間研修をすることができて良かったと今では強く思う。

まず何よりもかね善の皆さんが本当に親切にしてくださって、私たちのどんな質問にも答えてくださったり、会社のこと仕事のこと以外にも香港のことや皆さんが仕事に対して

個人的に思っていることなどを沢山お話してくださったりした。かね善の皆さんには本当に感謝している。その皆さんとお話を通じて、また皆さんが実際に働く姿を見て感じたことがある。それは会社で働くということにおいて、意外と自分次第な部分があるということだ。これまで私の中で、会社という組織で働くことは自分の思うようにやる部分、自分で考えて行動する部分がとても少ない、会社に縛られる部分がものすごく多いものだという考えが、なぜかあった。もちろん組織の一員になるからには、縛られる部分が全くないということはないと思うのだが、会社の規模や業務、会社の考え方が自分に合っているか否かなどによっては、自分の頭で考えて行動できる部分がなくなる働き方ができる、ということに気づくことができた。他の人にはそんなのは当たり前だと思われるかもしれないが、実際に社会人として働いている人たちにここまで接したことがなかった私にとって、このようなことに気づくことができたのは、大きかった。これは、中小企業であるかね善で働く皆さんが、自分のやりたいと思ったことを実際に仕事につなげている姿や、新商品を考える際に、それぞれが思った意見を言い合う部分を見たことや、「香港で日本の味を広めよう」という考えをかね善の皆さん、そして取引先の会社とも共有したうえで仕事をしているという話を聞いたことなどのおかげで、気づくことができたのだと思う。今まで勝手に、会社で働くことにマイナスなイメージを抱いていたが、そのイメージを払しょくすることができた。

また研修中に、かね善で働く方々のみならず、他企業で働く方々とお話できたこともとても良かったと思う。なかでも強く印象に残っているのは、かね善が輸送・保管を委託している会社で働く日本人女性である。その方は、長年香港で働いていて、広東語もネイティブ並みに話すことができ、私はその方が電話で香港人と広東語でやり取りをする姿にとっても驚いた。あれほどネイティブ並みに現地の言葉を話し、仕事をする日本人を、はじめて間近に見たからである。その方が、どのような経緯で香港において働くことになったのかということや、今まで香港で働いていて苦労したこと、日本に帰ろうとは思わないのかなどなど今思い返すと聞きたいことはたくさんあるのだが、そこまで質問する時間はなかったので少し残念である。しかし、現地の会社で現地の人々と同じように働く日本人の姿も見ることができたことで、こういう選択肢もあるのだなと気づくことができた。

たった三日間ではあったが、感じたこと気づいたことはたくさんあり、その中でも、今まで自分のなかでぼんやりとしていて現実味のなかった「働く」ということの輪郭がはっきりして、よりリアリティのあるものとなったことは大きな変化だったと思う。(角田)

最後に改めて、矩善香港食品有限公司の皆さんにお礼を申し上げたい。非常に親切に私たちを受け入れてくださり、本当にありがとうございました。

Job Shadowing at 香港ヤクルト

社会学部 2 年 春名陽 商学部 1 年 安永殷

ここでは特に断りがない限り、会社を益力多、飲料製品をヤクルトと表記する。

0. 香港益力多について

1969 年香港進出。2019 年で 50 年。官塘と沙田に営業所、大埔に工場がある。工場から毎日各営業所にヤクルトが運ばれて、そこから各営業所のルート課（後述）によって各小売店に陳列される。大埔工場にはルート課はない。日本と違いヤクルトレディは存在しない。理由は香港では共働きが一般的であり、昼に戸口で営業しようとしても、そもそも人がいないことが多いためである。また、高層マンションで営業するのは大変であるためである。

製品は、ヤクルト、ヤクルト LT、ジョア（各種）の 3 つである。ヤクルトとヤクルト LT は大埔工場で作られている。一方、ジョアは日本の工場で作られたものを空輸し、大埔工場では食品表示用のシールを貼るのみである。ジョアは香港が海外初進出で、2-3 年前に香港に登場した。

1. Job Shadowing 概要

日時: 2019 年 7 月 29 日～7 月 31 日

1 日目 BDD 同行

BDD (Business Development Departure) では新規開拓、各契約店舗が契約通りにヤクルトを置いているかを確認する。今回の同行では新規開拓ではなく、各店舗を廻っての確認業務を見て、陳列の手伝いをした。なお、BDD は沙田の営業所には設置されていない。

2 日目 広報課同行

工場見学と小学校（というより幼稚園）での健康教室に同行し、見学者の誘導や物を運ぶ手伝いをした。

工場見学は、ヤクルトをより知ってもらい、安全・安心して飲んでもらうため、（日本の）ヤクルトの成り立ちや代田イズム、（当然ながら）工場ラインを紹介する。工場見学の目的は、顧客に自社の製品に対する信頼を与えることで、長期的な関係を維持することにある。特に、地価が高い香港では工場がある会社が少ないので、工場のない他の会社と比べると、工場見学は差別化できる点として捉えることができる。

一方、健康教室では親子で参加してもらい、健康に関する情報を伝えていく中で、ヤクルトの有用性も一緒に伝えていく。「健康教室」としては、幼稚園以外にもお年寄りにも伝えたり、社会活動の一環として活動したりしている。



写真1：幼稚園で健康教室を行っている姿



写真2：ヤクルト工場の方達

3日目 ルート課同行（春名）

トラックに乗り、各店舗にヤクルトを配送。袋剥きや陳列の手伝いをした。沙田、大圍の小売店を廻った。

責任者同行（安）

責任者であるイップさんに同行した。イップさんと一緒に CITY SUPER やイオン等の大型スーパーに行き、商談を行う現場に連れて行ってもらった。商談に関しては、全て広東語で行われ、詳しくお聞きすることはできなかったが、後でイップさんに聞いてみると、香港ヤクルトが今年で50周年となるので、それに関するイベントについて商談をしたとおっしゃっていた。

今回の Job Shadowing では、社員に同行し会社に戻ってきた後、1時間程度質疑応答をするというスタイルであった。香港益力多には、英語や日本語を使える社員はいるものの、業務はすべて広東語で行われる。質疑応答は、業務に関する質問（業務外の疑問点でも対応して下さった）ができるように配慮して下さったためのものである。

2. 考察

感想・考察では社内の公用語が広東語であること、仕事の形態の 2 つの点に関心を待ったので、それぞれ論じていく。

社内の公用語が広東語であることについて

そもそも、社員のほとんどが実務レベルの英語を持つ必要がない。社員の多くは香港人である。香港人の多くが英語や中国語を話せるからと言っても、日常生活で使われるのは広東語である。スーパーやジュース・バーへ営業する際の言語は広東語になる。しかも、香港益力多の営業先のほとんどがそのような店舗である。つまり、生活様式的に、また営業方針的に社内公用語を英語にするある必要性が皆無であり、社内で英語の研修をする必要がないと考えた。また、広東語での営業技術が必要であるため、下手に社員に英語を勉強させて、その力を落とす必要はない。加えて、管理職の日本人が香港人と広東語で会話できるのは、変に壁を作ることなく、社内の風通しを良くしていると感じた。

従って、社内公用語を広東語にした方が明らかにメリットは大きいと考えた。

仕事の形態に関して

日本と仕事の形態に大きな差を感じることはできなかった。土地が香港である以上、香港の環境や香港人の思考に沿っていく必要がある。しかし、医食同源の考えは必ずしもヤクルトの売り込みに有利になるかどうかはわからない、という意見は想定外だった。ヤクルト以外にも他の漢方薬はあるし、またスーパーに色々な商品が置かれるようになったことで、ヤクルトを選んでもらえる割合が小さくなっている可能性もあるのだ。実際、医食同源だから売り込みに有利というのは短絡的な発想なのである。

ただ、今回の **Job Shadowing** で学んだことは、日本でも適用できることが多かったと思う。例えば、スーパーの売り場の面積を広く、また人が多い場所に置くために、試飲販売員を配置したり、ジョアとヤクルトの売り場を隣にしたりしていた。他社が使っているショーケースはどのようなものか見ることもあった。益力多が、工場見学と健康教室を通して購入者に対して何を伝えようとしているのかについても、理解できた。社会に出たこともなく、経営も学んだことのない自分にとって、これらの学びはとても楽しいものであった。

海外で働くことについて考えてみると、外国語で確実な意思疎通を行うためには、当たり前だが、自分の中でこれは使ってもきちんと意思疎通できる、という自信を持った言語が必要であり、どのような手段であれ、その自信を作る必要性もあると感じた。

3. 謝辞

春名 陽

今回の Job Shadowing を担当し、3日間質疑応答してくださった堀さん、そして香港益力多の皆様、今回の受け入れありがとうございました。そして、また台風 Level 8 が発令された7月31日に寮の前まで送ってくださり、ありがとうございました。



左写真は研修先でお世話になった方々と一緒に撮影したもの

左側手前から市川さん、川畑さん、堀さん、塚本さん

安 永殷

① 日系企業の強い繋がり

BDD 活動の時、私が回ったところは、日本のお弁当屋さんやヤマザキ等の日系企業が多かった。香港には日本以外にも多くの外国の企業がある。それにも関わらず、香港では日系企業同士の取引が多く、日系企業の繋がりが強いという印象があった。話をお聞きしてみると、以前には今よりも繋がりが強かったようだ。この話を聞いてみて、たとえ海外に進出したとしても自国の会社との関係を大切にすることが重要であると感じた。

② 共通語の重要性

今回の香港ヤクルト研修で、海外で働く人にとって現地語を学ぶ事の重要性を感じた。香港ヤクルトの場合、ヤクルトの納品を担当するルート社員や責任者であったイップさんも全員香港の方であり、香港ヤクルトの共通語は広東語であった。香港ヤクルトで働く日本人の方々も広東語でコミュニケーションを取っている姿が見られた。もちろん、香港は世界各々から人々が来ているグローバルな地域ではある。しかし、日本人の社員の方が広東語で直接話をされている姿を見て、現地語を学ぶ事が重要だと感じた。英語が会社の共通語である場合であっても、ローカルスタッフとの細かいコミュニケーションのためにも、現地語を学ぶ方が利点であると思った。

Job shadowing at 肇英賽業

社会学部 2 年 諏訪敦史 商学部 2 年 石井湧介

1. はじめに

私たちは7月29日から31日の3日間、肇英賽業でjob shadowingを体験した。肇英賽業を選んだ理由は、深圳でのものづくりに興味があったから、そして中国で働くということをより詳しく知りたかったからだ。先に結論を述べると、様々な経験や、今回のjob shadowingを体験しなければ出会えなかったような方々と知り合うことができ、将来のキャリア形成に大きく役立つものとなった。

2. 会社の概要

簡単に肇英賽業の説明をすると、金型設計や合成樹脂着色・配合、プラスチックのリサイクルなどの分野を事業として展開してきた会社である。一言でいえば、“プラスチックのトータルソリューションサービスを提供する”会社だ。

「大手コーヒーチェーンのスターバックスが、2020年までにプラスチック製の使い捨てストローを全廃する」というニュースを聞いたことがありますか？

今日では、この廃プラスチックによる環境破壊が問題となっている。肇英賽業ではこの廃プラスチック問題への対処を最優先に考えており、今回のjob shadowingでもこの問題を中心に扱った。

3. job shadowing の流れ

- 1日目：香港にあるChoEiの事務所に訪問し、ChoEiの社長である川副氏のお話を聞く。
- 2日目：深圳に行き、Plastic Worldの工場を見学。深圳にて宿泊。
- 3日目：深圳にて見学の続き。テクノセンター内の第一電材株式会社にも訪問。

1日目、私たちは経営・企画などを行う香港オフィスを訪問した。このオフィスで早速、川副社長からレクチャーをしていただいた。概要としては、私たちからの質問とそれへの回答といった質疑応答が中心だった。私からの質問としては「深圳（中国大陸）と香港の分業体制や、その関係」を質問した。回答を簡単に要約すると、「日系企業を含め、多くの企業は大陸に生産拠点を置き、経営やサービス・財務などを香港でおこなっている。理由としては、第一に大陸では人件費などのコストが低く抑えられ、また政府からの支援も充実しているから。そして14億人という魅力的な市場があり、市場拡大の余地があるためである。一方、香港に拠点を置く理由とは、税制上の優遇措置や金融センターとしての重要性、豊富で高度な人的資源が存在するためである。近年、地政学的リスクや相対的な人件費の上昇に伴

ってメーカーが東南アジアへシフトしているが、多くの企業、特に中小企業などは中国に生産拠点を置き続けているのは、中国には既にサプライチェーンが構築されているから。そして、中国に比べて東南アジアの技術力は、まだ不十分である。また、最大の要因として、中国には大きな市場があり需要がまだ伸び続け、購買力も上昇し続けているからだ」とのこと。受験勉強時代、多くの工場が東南アジアに移転したと書いてありながら、その移転した企業数が伸び悩んでいたのは、これが理由だったのかと感銘を受けた。1日目は質疑応答で終わったが、マーケティングの話題になった時についていけず、社会学部の自分は、己の無知を痛感した（石井くんがスラスラと答えていたのには驚きました）。

2日目には、工場のある深圳へと行った。子供の頃、深圳に一度だけ訪れたことがあるが、その時と大きく変わっていることに、中国の経済発展を垣間見ることができた。肇英賽業の工場は、日系の中小企業が集積している工業団地の一角にある。工場は決して大きいとは言えないが、多くの製造過程が自動化されており、工場内の従業員のプロ意識も高いと感じた。そこでは、プラスチックの配合過程を見させていただいた。工場では担当の方から「新しいビジネスモデルを考える」をテーマに廃プラスチック問題等の対応策などを講義していただいた。余談だが、「このビジネスプランの企画に4Psを使用すること」と書いてあった。ここで経営学入門（他学部）の知識が生きるとは思ってもいなかった。話によれば、4Psはビジネスの場で多く使われるそうだ。

このビジネスプランを考える中でキーポイントだと感じたのは、「利益と環境問題の両立」だ。プラスチックメーカーである以上、プラスチック製品で儲けなければいけない。一方で、プラスチックが引き起こす環境問題にも取り組み、CSRなどの観点からも環境に配慮しなければいけない。これこそが肇英賽業が取り組んでいる課題だ。

3日目には、予定に入ってなかった同じ工業団地の第一電材という商社の工場を見学させていただいた。商社が工場？と思うかもしれないが、この会社は専門商社であり、主に電線を扱っているのだ。工場担当の須藤さんから会社の説明や「中国で働くこと」についてお聞きした。須藤さんは、数回転職をした末に、この会社に落ち着いたということで様々な仕事での苦労話をお話ししてもらった。

4. 川副社長のお話

Job Shadowing の初日に香港にて川副社長にお話をうかがった。主な内容は、華南で働く日系企業の利点と香港の産業の現状、今後の展開に分けられる。まず華南で働く日系企業に関しては、現在、華南で働く日系企業は厳しい状況にあるとのこと。その主な理由は、中国国内の賃金上昇である。中には、マレーシアやフィリピンなどの東南アジアに移転する企業も出ているが、現状では、中国の方がインフラの整備が進んでおり、加えて、すでに中国国内で築いたサプライチェーンを手放すデメリットがあるため、中国で厳しい競争にさらされる日系中小企業が少なくない。しかし、日系企業は精密機械において世界のトップに立っているため、その技術は中国でも活かすことができるようである。香港の産業の現状と今

後の展開に関しては、香港で働くことの利点を教えていただいた。その利点は、税制戦略・キャッシュフロー戦略・人材の3つにあるという。香港では配当、金利収入、キャピタルゲインにかかる税率がゼロであり、これが香港の強みとなっている。しかし、製造業が大陸側に奪われてしまい、現在発展が停滞している。これを解決しようと、一路一帯や大湾区計画が利用されている。今回の訪問では、書籍やネットでは調べるできない、中国日系企業の生の声を聞くことができた。地の利を活かして、海外で働くことは、情勢を見極める戦いの連続であると感じた。

5. 第一電材須藤氏のお話

三日目には電線・ケーブルを製造する第一電材株式会社を訪問した。そこでは、現地の女性工員達がケーブルを製造する姿が見られた。多くが手作業であり、OJTのもとで作業が円滑に進められていた。また、お話しいただいた須藤さんから、海外で働くために必要なコミュニケーションについて教えていただいた。工場建設から半年は、業務よりもコミュニケーションに力を入れたそうである。心のつながりがなければ、工員に働いてもらうことは難しいのである。



6. 考察

最初にこの **job shadowing** を受け入れてくださった肇英賽業の方々、お世話になった方々へ心より感謝申し上げます。今回の体験は、予想以上に自分の将来の指針となり、考え方を変わるきっかけとなった。今までは、大企業に入ることが当たり前だと思っていた。しかし、肇英賽業や第一電材などでお話を聞いているうちに、この考えが変わってきた。肇英賽業でお世話になった田名部さんや第一電材でお世話になった須藤さんが口を揃えておっしゃっていたことは、「中小企業だからこそ持つ利点」であった。それは大企業と違って若い人たちも重要な役割を担うことができる点だ。つまり、自分の意見などを実際に行動に移せ、自

らの経験とできるということだ。また、コミュニケーションスキルの重要性も痛感した。従業員と通訳なしで会話をし、打ち解けている姿がとても印象的だった。

7. まとめ

改めて感じたことは、自分の付加価値を高める必要があるということだ。例えば、語学に関しては広く使われる英語だけではなく、中国語などを学ぶ必要があると感じた。そして、若いうちに様々な教養を身につけ、いろいろな経験をする必要があると確信した。それは、人との信頼関係を作る上で大切なことであると、今回の体験から感じたからだ。

(諏訪)

今回の研修で、国際的に働く人々の姿を多く見ることができた。一概には言えないが、彼らは自国の誇りと、働いている国への感謝をもち合わせていると思った。これは今まで自分が持ったことがない考え方であり、人生の見方が大きく広がったように感じた。他国で働くということは、単に効率の追求の結果ではなく、自分の信念に基づくものでもあるのかもしれない。

(石井)

コンクリートジャングル、香港

諏訪敦史

多くの人が持つ香港のイメージとは、美食の街、ジャッキーチェン、たくさん的高層ビルであろう。チムサーチョイから見た香港島は、ビルの多さに誰しもが驚くはずだ。しかしながら、香港は高層ビルだけではないのだ。街から一歩出ればそこはもう緑の中。香港の面積は東京都の約半分だが、その面積の約70%が森林に覆われており、国土の約40%が自然公園として保護されている。香港がイギリスによって統治されていた間、イギリス人が余暇のために多くのトレイル・コースを整備した。そのため、今でも数多くのトレイル・コースが残っており、多くの人に愛されている。統治時代にマクリホース総督という人がトレイル・コースを多く整備したことから、マクリホース・トレイルという名のものもある。また、アジアナンバーワンのトレイル・コースと評価されたコースも存在する。

8月11日、私がJob Shadowingでお世話になった肇英賽業で、バリーさんから香港のトレイルにぜひ行きましょうというお誘いをいただいたため、何人かの研修メンバーと一緒に行くことになった。今回は、この山登りについてのコラムである。個人的には高校時代から登山を嗜んできたことから、香港でも山登りをしたいと思っていた。そのため、このお誘いは内心とても嬉しかった。

朝7:30に寮のロビー集合という、なかなかハードな始まりだったが、集合時刻を間違えるという痛恨のミス。バリーさんを待たせてしまった。バリーさんと自分たちだけなのかと思いきや、登山同好会的なメンバーの方と一緒に登ることに。同好会のどの方も英語がペラペラということで、歩きながら様々な会話をした。本当に優しい方ばかりだった。

我々は、Eagle Nest Nature Trailというトレイル・コースを歩いた。バリーさんの話では、香港のトレイルの中では簡単なコースとのこと。驚いたことに猿が多くいた。香港で野生の猿に会えるとは思ってもいなかった。感想記だけでは無味乾燥なものとなってしまうため、学術的な発見を述べると、香港はケッペンの気候区分でCwに区分されており、亜熱帯とも言われている。そのため、土壌も赤土のポドゾルであり、日本と違った気候にいるのだと実感できた。植生も熱帯に近いものが多かった。トレイルの道はしっかり整備されており、スニーカーでも楽々だった。また、香港人だけでなく外国の方や、老若男女問わず多くの方が楽しんでいたので印象的であった。登山同好会のメンバーの方が、日本の演歌?!を流しながら歩いており、香港流の登山の楽しみ方を教わった。途中辛く長い階段もあったが、なんとか頂上につくことができた。下山する際、木々の隙間から見える景色というのは言葉を失うほどだった。途中、景色の良いところで写真などを撮りつつ、み

んなで歌ったりしながら、4時間ほどでトレイル・コースを踏破した。

こんな疲れた後には飲茶っしょ!!! ということで、近くのショッピング・モールで飲茶をみなさんといただいた。登る前はぎこちなかった会話も、食事の時にはすっかり打ち解けていた。運動のあとのご飯や飲み物は至福だと感じた瞬間であった。田村さんと栗田さんがバリーさんと打ち解けていたのは、見ていてとても嬉しかった。この山登りを通して同好会のメンバーの方と交流したことで、人の繋がり大切さや素晴らしさを感じる事となった。個人的な目標は、前述のマクリホース・トレイル全区間(100km)完走することである。

このコラムを読んでいただいた方、香港の印象は変わったでしょうか?! チムサーチョイでショッピングももちろん良いと思うが、ビルの谷間から見える山々に登って見るのもいかがでしょうか? そこから眺める景色は、きっと素晴らしいに違いない。実は、コンクリートの物体だけではなく、天然のビーチも眺めることのできるトレイル・コースも存在する。香港の自然公園の一部はジオパークに認定されており、本当に自然豊かな場所である。個人的には、香港政府も観光資源として、この部分をアピールしていけば良いのにと思ったりもする。



上：下山中に見えた景色。海の反対側が香港島。
下：同好会の皆さんとの写真。



香港中文大学 Summer Program

石井湧介、春名陽

1. プログラム概要

研修の2週間目からは、香港中文大学で開催されている CUHK International Summer School 2019 に参加した。月曜日から金曜日、一日計6時間の中国語クラスがあり、3週間にわたって中国語学習に取り組んだ。CUHK の International Summer School のページから申し込むと、Office of Academic Links (以下 OAL) という部署からメールで、香港入国の手続きや OnePass という manaba のようなシステムへの登録の指示をしてくれる。事務作業は基本的に英語を使う。OAL からデモ情報や Cultural Activity (後述)、宿舎のチェックイン・アウトに関する情報、また中文大学に関する情報が提供される。

2. クラス分け

このプログラムでは自分の中国語のレベルに合わせてクラスを選ぶことができる。レベルは全部で5つに分かれていて、Level 1 lower、Level 1 upper、Level 2、Level 3、Level 4 のクラスがある。それぞれのクラスの詳細は次ページ以降で紹介する。5月頃にオンラインにてプレースメントテストを受け、成績に応じて、申請したクラスに入ることができるかどうか決まる。ただし、最初の授業を受けた後に自分のレベルに合っていないと感じた場合は、先生との話し合いを通してクラスを変更することも可能。

3. 授業

中国語の授業は午前のクラスと午後のクラスの2部構成となっている。午前のクラスは文法の学習が中心であり、午後のクラスは会話を中心に学習する。授業時間は、午前のクラスが9:30~12:30、午後のクラスが14:30~17:30となっている。午前のクラスと午後のクラスでは先生が異なり、クラスの雰囲気も変わってくるため、計6時間の授業といっても間延びした感じは全くない。授業内で使用される言語は英語と中国語だが、2言語の使用比率はクラスによって異なり、上のクラスに行くほど中国語を中心に授業が進められていく。数日に一度課題が出され、オンライン上で課題を行うため、香港には自分のパソコンを持って行く必要がある。

4. 参加学生

Summer Program には一橋大学の学生の他に、京都大学、南山大学、上智大学、東京学芸大学、立教大学、明治大学などの日本人学生が参加しており、欧米からも20人以上の学生が参加していた。3週間のプログラムの中では、これらの学生達と交流する機会も多くあった。

寮から教室まではかなり離れている。
基本は学内バスにて移動するが、
歩くと 25 分程かかる。



5. Cultural Activity

Cultural Activity では料理教室や判子（印章）の作成、書道のワークショップの開催など授業後に行うものや、週末に香港をツアーするものである。これら Cultural Activity は CUHK 側が企画してくれた。参加はすべて無料である。香港ツアーは 2 回あり。1 回目は 8 月 5 日のガイダンス終了後、ヴィクトリアピークやスタンレー（赤柱）に連れて行ってくれた。2 回目は土曜日の 8 月 10 日にランタオ島へツアーしてくれた。基本的にバスで移動した。



大型バスで香港を巡る

レベル1 - Lower クラス概要

安永殷、林穂高

この研修では事前に受けるテスト等で5クラスに分かれてそれぞれ中国語を勉強した。Lower は中国語初心者や1年未満の人が中心で14人ほどであったが、初心者も十分ついて行ける授業であった。Lower のなかでも欧米の方々の漢字がわからない組と、日本人中心の漢字がわかる組に分かれていたため、欧米の人と交流する機会はクラス内ではなかった。

① 時間

9:30~12:30 までの午前の文法の授業と、14:30~17:30 までの午後の発音の授業があった。計6時間というハードスケジュールだが、きちんと1時間ごとに休憩を挟んであったので集中力が途切れることなく勉強できた。ちなみに朝は寮から授業があるビルまで直通のバスが出ていたので楽に通学できる。しかし、まれに3分ほど出発が早かったり、朝のエレベーターで混雑したりして乗り遅れてしまう場合があるため、きちんと早めに行動することが大切である。

② 午前：文法の授業

担当は李先生と言い、とても優しく決して怒らない。授業中に学生が居眠りをしているも怒らず、むしろいじっていく先生だった。例文を読むときも一人一人の発音を確認してくれるため初心者でも確実に上手になれる。何回でも直してくれるし、学生が間違えたところを覚えてくれる心優しい先生。キャラクタークイズやミニテスト、宿題が一日一個くらいのペ



ースで回ってくるが、どれも復習を5分くらいすればできる簡単なものばかりであった。

最後のテスト後には一緒にお昼ご飯を食べてくれる、すてきな先生のクラスだった。

③ 午後：発音の授業

担当は He 先生。優しく、午後お昼ご飯を食べ終わってうとうとしている学生がいても怒らず、休憩をとってくれたり、おやつにエッグタルトやカップケーキを買ってきてくれたりした。フェアウェルディナーにも駆けつけてくれた lower クラスの香港のお母さんのような存在。話し方がかわいく、声調の教え方が独特でみんなまねしていた。主にパワーポイントを使いながら新しい単語や文法を学習しつつ、クラス内で会話文を考えて劇のように発表することや、ペアワークもあり、楽しみながら勉強できた。

ただし、毎回パソコン上で 30 分程度の宿題が課されたり、リスニングテストやスピーキングテストがあったりと午前の授業より少し難しかった。最後のテストは一斉にリスニングで聞いた質問にその場で答えるというなかなかハードなものだった。

クラスみんなや先生のおかげで授業や中国語の勉強がとても楽しかったです。
ありがとうございました！

レベル 1 - Upper クラス概要

馬場敦也

レベル 1 の upper クラスの授業内容について記述する。

①授業時間

まず、このクラスは午前には文法中心の授業、午後にはリスニング中心の授業があった。

文法中心の授業は (1) 9:30~10:15, (2) 10:30~11:15, (3) 11:30~12:15、リスニング中心の授業は (4) 14:00~15:30, (5) 15:35~16:35, (6) 16:40~17:05 くらいの時間で行われた(あくまで目安)。文法、リスニング含め、計約 6 時間の授業が毎日行われた。

②クラスについて

全体では 23 人いた。日本人がほとんどで、他の国籍を持った人はデンマーク人、イギリス人、イタリア人の 3 人だけだった。京大や学芸大の人が多く、にぎやかな教室だった。

学習に意欲的な人が多く、発音の時間はみな大きな声で発音していた。他のクラスと比べると休む人も少なかったと記憶している。



最終日に撮ったクラス写真

③授業について I (予習/復習/宿題)

授業は午前の文法と、午後のリスニングの 2 つがあると述べたが、両者は完全に独立しているわけではなく、その内容には重複があった。具体的には「単語」、「文法」、「扱うトピック」である。また、これら 2 つの授業は、進度も日によって異なるため、一方の授業が予習的になることもあれば復習になることもあった。

[予習]

予習はやる人とやらない人に分かれる。やらない人が大多数で、夜な夜な香港の街へくり出す人も多かった。やる人は結構真剣にやっていた。一年生で中国語学習歴が半年にも満たない人は、何度か次の講を読んだり、文法を予習したりと努力していたそう。私は宿題以外にはあまりやらなかったが、次の講の単語に目を通すくらいのはしていた。単語をやる人は多かったと思う。

[復習]

復習はやったほうがいい。リスニングテストは既習講のスク립トから出題され、テスト後はすぐにその音声素材が使えるので復習やシャドウイングに有効である。授業内ではかなり復習をやらされるので、やっておくと授業もスムーズに行え、定着にもつながる。

[宿題]

宿題は、文法の授業では2、3回の作文の宿題が出たのみだった。また宿題が課されたとしても授業中に先生が時間を設けてくれ、その時間内に終わる場合も多かった。一方でリスニング中心の授業では4回のリスニング課題に加え、やるやらないは自由ではあったが、次の日の授業内で行われるスピーキングテスト（パソコンの画面に向かって自己紹介を行ったり、自分のおすすめの観光地についてしゃべったりするなど。テンプレートは用意されるので、とても大変というわけではない）の準備が課された。

④授業についてⅡ（内容）

文法、リスニングと便宜上区別して書いてきたがオーラル中心という点では一緒だった。両者とも必ずペアワークが存在し、時には席を立てて質問し合うというものもあった。適宜中国人の先生からフィードバックをもらえるため、発音はかなりきれいになると思う。教授言語は英語3割、中国語7割という感じだった。

授業の内容を紹介すると、①自己紹介、②約束、③～な〇〇を食べるのが好き、④～と...の距離、⑤暇なとき何をしたいか、⑥暇なとき何をしたか、⑦一人いくらか、⑧病気の会話、という流れだった。このように、日常生活で使えるような中国語を中心に学習した。私はこの香港研修の後で、北京に行く機会があったのだが、お店で値段を聞いたり、現地の学生に自分の趣味について話したりと、香港での学習の有効性や実用性を確認できた。

授業の内容を大きく左右するのはクラスメートと、先生であると思う。このプログラムは先生が個性的で本当に面白かった。文法は Sun 先生、リスニングは Zhang 先生であった。Sun 先生は自身のビール腹をよくネタにしていた。「啤酒 (pǐ jiǔ)」の発音は完璧になった。Zhang 先生は結構スパルタな先生だった。でもみんな大好きだった。



Zhang 先生の授業風景



Sun 先生の授業風景

Zhang 先生の授業が残り三回となったときに最後のディナーで歌を唄うと言い出した。ほとんどの学生は中国語で歌を唄うなど、初めての経験であり、初めはおっかなびっくり歌っていた。だが、その最後のディナーでは堂々と歌い、文化や国籍を超えて絆を深められた

ような気がする。

⑤まとめ

このコースには、一橋大学でいうと 2～3 ターム分くらい中国を勉強した人が多かった。私は 3 ターム分の勉強をしていた（速習、速習、中級（HSK 対策））が、それでも初めは結構きつかった。だが、1 ターム分しか学んでいないにもかかわらず私よりできる人も多く、予習・復習など真面目にやれば、その分返ってくるいい授業であると思う。

先にも書いたが、この授業は日常に深く関わる実践的な授業である。これから中国に行ってみようと考えている人や、中国語をこれから真剣に学ぼうと計画している人にはおすすめである。

たくさんの面白い人と出会え、いろいろな学びがある大変価値のある授業だった。

クラスみんな、先生方、ありがとうございました。

レベル2クラス概要

山口悠作

レベル2は一橋大学からは私、法学部2年の山口のみだった。一年生の時に必修の第二外国語で中国語を8単位とった後に二年生の春夏学期で会話中級を2単位とった。春休みにサークルの中国人留学生に中国語で話しかけたら喜んでくれたのもっと話せるようになりたいなと思ってこのプログラムに参加した。実はLv.2は他に欧米からの留学生のクラスがあって、私のクラスは日本人が12人、アメリカ人、シンガポール人、中国人がそれぞれ一人ずつのクラスだった。授業はほとんど中国語で行われたため最初は聞き取るのに苦労したが、時間が経つに連れて聞き取れるようになっていって、8割くらいしっかり聞き取れるようになった。午前の王先生の授業では文法と単語を学習してから教科書本文の学習をし、午後の韓先生の授業では午前に習ったことを用いて様々な表現方法を学んだ。学んだ内容は日常生活のことで、旅行計画、交通安全、見た目の特徴、逸失物の対処方法などについてだった。午前の宿題は5ページくらいの文法のプリントが出されて、午後の宿題はウェブ上の20問くらいのリスニング問題が予習、復習でそれぞれ二回ずつ出されて、80文字くらいの作文が全体で二回出された。個人的には宿題の量も難易度も適切だったと思う。時々小テストがあり、こちらはきつくなかったのだが最終日の午後のスピーキングテストが1分半の間に写真の状況をヘッドフォンマイクに向かって説明するといったもので、苦戦した。ちなみに午前の最終テストは文法・語彙問題と旅行計画を作文するものだった。

先生はお二方ともスライドを作って丁寧に説明してくださったので、習った内容がしっかり定着した。最終テストの前日には韓先生がキャンパス内にある高級レストランで昼食をごちそうしてくださって、とてもおいしかったし、食卓での会話も弾んだ。また、同じクラスの三年生が先生と冗談話をして楽しんでいたりと、一緒にレストランに食事をしに行ったときにも店員との会話を難なく行えていたのを見て、私もすらすらと会話できるようになりたいと思った。



レベル4クラス概要

春名陽

この項では香港中文大学を中文大学と表記する。

1. 授業

午前の授業は会話、午後の授業は読解が中心だった。教授言語は中国語である。英語を使っていたのは単語を言うときのみで、回数にしたら10回行かないくらいである。中国語で中国語を学ぶ形態である。ただし、香港人がいたためか、先生は繁体字で板書したり、(簡体字とは別に)繁体字のプリントを準備したり、blackboard 上では繁体字でも課題を提示したりしていた。基本的に教科書に沿って行く形式だった。教科書は新视角高级汉语教程上册を使用した。教科書は5章立てになっており、それぞれの章にテーマが設定されている。PACE で使う教科書を想像していただければよいと思う。課題はblackboard という一橋大学で言うmanabaのようなページから提出する。Level 4は7人だった(編成は日本人3人、韓国人1人、アメリカ人1人、香港人2人)。

2. 午前の授業

PACEのような授業スタイル。新たな章に入ると、まず初めに热身活動をする。热身活動では隣の人とその話題について会話して、そのテーマに関する知識を活性化させる。その後は教科書の文章の単語とその用法、重要表現を確認し、文章を朗読する。朗読時には発音を指導してくれる。先生から話を振られることも多く、話す機会を提供してくれる。新出単語を当てるゲームもあった。授業の時間の最後にはディスカッションがある。テーマはどのような基準で就職活動をするかとか、体罰についてどのように考えるかなどである。

2章ごとにそのテーマに関するプレゼンとblackboard 上での聞き取りテストを行う。5章目は期末テストに回された。プレゼンは5分程度、質疑応答が有る。

基本的にパワポを使って授業するが、学生が難しい単語やそのテーマのキーワードを使った時はその単語を白板に書いてくれる。

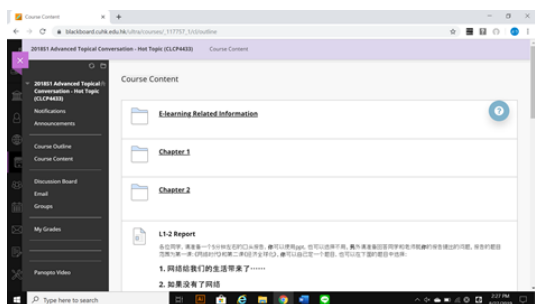
課題の量は多くなく、章が終わるごとにblackboard 上でリスニングクイズを解くのとプレゼンテーションの準備をするくらいであった。もっとも自分はプレゼンの準備に半日近くを費やしたが...

3. 午後の授業

教科書は午前と同じものを使うが、文章を精読していく授業スタイルである。例文を朗読しつつ、文語の単語、表現も確認していく。最初に学生に単語の意味を口頭で説明させるが、わからないとき、また表現できていないときは先生が補助してくれる。また、教科書中に出てきた表現を勉強し、それを使ってその場で作文する。例えば、对——进行(——について

行っている) という表現を学習したらならば、その場で某所大学对现在日本经济进行研究 (ある大学では今の日本経済についての研究を行っている) といった例文を作り、口頭発表する。誤りがある場合はその場で訂正される。授業の最後にその回で学んだ単語や表現の意味を再び説明させ、また例文を作らせる。テストは1章ごとにある。

課題は、blackboard 上で教科書の文章の予習・復習を行う。予習の内容は普通の読解の問題。復習はその日に習った単語や構文の意味を答えるというものである。



左上: blackboard 上にアップロードされているプレゼン (口頭報告) の課題に関する指示。

右上: 午前の授業の休憩中の様子 (先生が一部学生の発音の矯正を行っている)

左下: 午後の授業の休憩中の様子 (スクリーンに映し出されているのは教科書の文章)

右下: 新视角高级汉语教程上册

FOOD EXPO 2019

角田友佳子

「香港といたらここ！」という観光地ではないのだが、行ってよかった、楽しかったと思えるイベントがあったので紹介したいと思う。ガイドブックに載っていない「香港」を見たいと思った方にはぜひ行ってみたい。

<FOOD EXPO とは？>

まずフードエキスポとはそもそも何かということを中心に説明しよう。フードエキスポは香港で毎年8月頃（今年は8/15～19だった）開催されている、香港はもちろん世界中の食が集まるイベントで、香港島の中心部である湾仔にある香港コンベンション&エキシビションセンターというとてもとても広い建物が会場になっている。「フード」と言いつつ食べ物だけではなく、電化製品や調理用品・お茶・化粧品のブースもある。入場料は普通のもので25HKドル、グルメゾーンという少し特別なエリアにも入ることができるものが40HKドルであり、手が出せない程高いということはない。それでは次は会場の中がどうなっているのか紹介していこう。

<食べ物のエリア>

まずなんといってもメインである食べ物のエリアについて。食べ物は大きく3つのエリアに分けられる。「トレードホール」「パブリックホール」「グルメエリア」である。

トレードホールは主にバイヤーに向けたエリアで、ここには世界中の国と地域からそこが売り出したい食べ物が集められている。このエリアはその場で買って食べるものではなく試食がたくさんできるエリアになっていた。出ていた国は、フランス、ポーランドなどのヨーロッパから、ドバイ、アラブなどの中東、インド、タイなどのアジア、メキシコ、ブラジルなどの中南米まで本当に世界中から集まっていて、もちろん日本からもたくさん出ていた。驚いたのは日本のエリアには各県から出ていて、さらにスペースも広がった事である。お客さんもたくさん集まっていて、改めて日本の食べ物の人気を感じた。個人的にはいろいろな国の見たこともないような食べ物を少しずつ試食できることが楽しく、それぞれの国のブースにはその国の人がいるのであの場にいるだけで様々な国の人を見ることができたことが新鮮でおもしろかった。



←トレードホールの日本のエリアの一部

パブリックホールとグルメエリアはどちらも主に一般の人に向けたエリアで、違いはグルメエリアのほうが少し高級なもの、また香港だけでなく海外からの輸入品も多く販売されているという点だけなのでまとめて紹介する。このふたつは試食もちろん沢山あったが、それ以上に屋台のようになっているお店がたくさんあって買わずに見るだけでもとても楽しめると思う。もちろん食べ歩いても楽しい。こちらは一般の人向けというだけあって場所によっては大混雑だった。



香港で販売されているものが集まっているエリア。この場所が一番混んでいた。



屋台のようなお店で買ったアワビと小籠包のようなもの。

<その他のエリア>

食べ物以外のものが集められたエリアもあった。まず電化製品や調理器具。ここにもたくさんの方が集まっていた。実演販売をしているところがたくさんありとても賑やかだった。次にお茶。さすが香港というくらい主に中国大陸の各地方や台湾から本当にたくさんの種類のお茶が集められていて、ここにはないお茶はないのではないか、というほどだった。試飲できるものばかりで、お茶が好きなので個人的にとっても好きなエリアである。また化粧品や美容器具を集めたエリアもあった。ここには主に韓国からきている企業が
多くあった印象を受けた。さすが美容大国である。



← 少しわかりにくいですが、電化製品を販売しているエリア。日本の製品も販売されていた。

<最後に>

簡単に紹介したが規模の大きさ、お祭りのような空気感
は実際に行ってみないとわからないと思うので興味を持
った人にはぜひ行ってみたい。

個人エッセイ

百聞不如一见

諏訪敦史

「百聞は一見に如かず」という諺がある。英語なら **seeing is more important than hearing** または **seeing is believing** である。由来を見てみると漢の皇帝が、反乱した遊牧民族の鎮圧のため趙充国に必要な戦力を聞いた際に発せられた言葉だそう。（『漢書』趙充国）

ではこれが研修と何の関係あるのか。それは自分が以前から関心を持ち続けていた抗議運動と関係がある。私は香港生まれであることから、第二の故郷と言えるこの土地に関心を持ち続けていることは当然だと思う。

ちょうど僕らが香港に行く直前、200万人規模の大規模抗議運動が発生した。香港の人口が700万人超であることを考慮すると、人口の約3分の1が抗議運動に加わったことになる。よく考えてみると、これだけの規模が政府に対し抗議をしているのに、香港政府は倒れていない。これは、民主主義が根付いた国では考えられないことだと思う。香港の民主主義は不完全である。つまり、議会を通して民衆の意見を反映させることができない。別の言い方で表現すると、「民主」はないが「自由」がある。だから、デモという行動を通して意見を反映させようとしているのだと思った。今回のデモのきっかけはこの「自由」が失われるという危機があったからに違いない。

実際に香港での生活を通して思ったことがある。まず、至る所、特に中文大学内にたくさんの張り紙が貼ってあったことだ。「光復香港」「時代革命」というバナーがあちらこちらにあった。シャトルバス乗り場の足元にさえ書かれているのには閉口してしまった。また、寮の壁にも隙間なく貼られ、レノンウォールも存在していた。彼らの書き込み、張り紙を見ると彼らの必死さ（彼らの香港が破壊されるのではないかという）、自由・民主への意志が強く感じられた。Causeway Bay でたまたまデモ隊と遭遇したことがあったが、参加者の多くは若者であった。

中文大学で仲良くなった女子大学生にいくつかデモに関する質問をしてみた。彼女はとても親切に答えてくれた。彼女のメッセージを読んで感じたことは、この状況が切迫しているということだ。彼女らは、一国二制度が壊れつつあることを肌で感じ、もはやこの法律が無力であることを自覚している。加えて大陸の人が香港の資源、例えば大学の寮の割り当てや募集枠を奪っていることに対しての怒りもあるそうだ。家賃が世界一高いと言われる香港で大陸の人が不動産投資目的で家を買って漁ることにしてもひどく怒っていた。アラブ

の春でも、政府寄りの報道をするテレビなどの従来のメディアに対して、新鮮な情報が得られる SNS を皆が駆使したように、香港でもそのような状況が起きているとのことだった。実際、多くの若者は SNS を通じてこれらの問題を取り上げ、テレビを見ている若者は少なかったように思える。

また、ある週末に香港人の友人と話す機会があった。香港の中心部のマンションに自宅がある彼の家庭は、香港の中でも上流階級に位置するであろう。彼の両親らともこのデモについて話したが、家族全員でデモに参加しているようだ。若者だけではなく、経済的に豊かな人たちがさえこのようにデモを支持していることに驚いた。

彼らは、日本のメディアによるデモの取り扱い方にも疑問を述べていた。メディアではデモ参加者が暴徒化しているとの論調だが、実際こちらで生活し、色々な情報を知るとむしろ警察側こそが暴徒化していると思えてくる。警官が無抵抗のデモ参加者にゴム弾や催涙弾を撃つ必要は果たしてあるのだろうか。メディアの報道の仕方にも注意を向ける必要があると感じた。メディアの情報を鵜呑みにするのではなく、自分の頭で考え、批判的に様々な角度から見ることで、つまりメディアリテラシーが大切であると再認識した。

こうした一方でこれらの抗議活動を快く思っていない人もいることは確かだ。抗議活動が引き起こしたのは経済への悪影響や交通への影響にまで広がっている。抗議は平和的に行われていると抗議者は主張するが、一部では公共物の破壊などがあったことは確かであろう。観光業が主要な産業である以上経済への影響は避けられない。中国との経済的なつながりがある中で、これらの運動に否定的な人がいることは不思議ではない。

つまり、社会の分断は想像以上に深刻であったということである。僕らと同じ世代の人は自由・民主といった西洋的価値観を重視するのに対し、上の世代では経済的なつながりを優先し、自由や民主などの価値観を二の次だと考える人もいる。つまりこの世代には「金儲けできれば十分」だと考える人が多いと思われる。この“分断”は修復できないレベルに到達しつつあるのではないだろうか。西洋的価値観と中華的思想は相容れないとも感じた。

中文大学には香港人の他にも多くの大陸からの留学生も在籍している。彼らは中文大学に貼られたポスターについてどう思っているのだろうか。個人的な観察として、彼らは見て見ぬ振りをしていたように思える。過去には香港人学生と大陸からの留学生の衝突もあったと聞いている。市内でも反政府デモが行われる一方で、警察や政府を支持するデモも行われていた。

「自由」とは古代ギリシアから始まり、フランス革命など多くの命を犠牲に得てきたものである。そして皆が生まれながらにして持つ、**Human Rights** の1つである。香港で自由・民主を求める抗議運動を肌で感じたことで、我々はこの自由・民主の尊さを認識し、積極的に行っているのだろうかとの疑問に感じた。もし同じようなことが日本で起こったら、若者も抗議運動をするのだろうか。無関心を貫き、抗議する彼らを軽蔑するのではないだろうか。

そんな気がしてならない。

自分の国の将来は自分たちが決めるべきであり、その将来とは、今の若者こそが主役となる社会である。将来を決める権利は何人も奪うことのできない権利のはずだ。そんな権利を求め自分の社会的地位、将来を犠牲に抗議する若者の行動力に尊敬の念を抱く。

「自由」とは空気のようなものだとよく言われる。普段はその存在に気づかないが、失った時にその存在に気づく。香港の人はその“空気”を求め行動しているのだ。彼らの要求を通すことは難しいだろう、いや不可能なのかもしれない。しかし、その行動をすること自体に価値があると思う。

香港はこの“分断”を修復しなくても良いのだろうか。いや、そんなことはない。歴史を見ても、“分断”は様々な悲劇を引き起こしてきた。イデオロギー的問題や経済的な問題も含むことから、香港の“分断”は簡単には修復できないだろう。しかしながら、時間をかけてでも必ず修復すべきものであると考える。なぜなら、香港が繁栄してきたのは、イギリスの統治下で発達した西洋的文化・価値観と、中国的価値観・文化が混ざり合い西洋・東洋の交錯地として独特の文化を生み出してきたからだ。それは様々な文化・習慣に寛容な社会であり、世界のどこを見渡しても存在しないエネルギッシュな社会である。

私が知っている香港は、互いを憎み合うような今の香港ではない。抗議運動が平和的に終わり、双方が納得するような結果に終わることを強く願っている。

そして、このような歴史の 1 ページに残るような時期に香港に来られたことをとても貴重に思う。また、自由と民主の大切さを改めて認識した短期留学であった。そして価値観や文化などが違う相手でも、まずその存在を受け入れることこそが大事であり、それは寛容な社会に必要なものだと確信できた。なぜなら、「寛容」こそが社会の分断を修復できるものだと信じているからだ。

加えて、自分の目で直接物事を見るということの大切さを実感した。メディアなどの情報は様々な解釈が入り込んでいるために、当事者の主張はかき消されやすい。香港で様々な立場の人に出会い、語り合ったことで自分の狭い思考を広げることができた。実際、出会った中文大学生のような意見はメディアには報道されていない。ただ政治的な問題だけではなく、彼らの生活に悪影響を与えているということが、このデモが広がった理由であると考えられる。

そして、我々はこの香港で起きていることに注目するべきである。なぜなら、この問題は人ごとではないからだ。世界的に見ても社会の分断は広まりつつあり、加えて権威主義的風潮、排外的思想が蔓延しつつある。EU の移民排斥問題もその一例である。日本にとっても対岸の火事ではない。“サイレントマジョリティー”になるべきではないし、「権利の上に眠る者」にもなってはならないと強く思っている。

(→寮のエレベーター内のポスター。毎日のように張り替えられ、日本語のポスターもあった。大陸からの留学生は見て見ぬ振りをしていた気がする。)

(↓チムサーチョイのレノンウォール。様々な言語で応援のメッセージなどが書いてあった。)



〈あとがき〉

このように政治的な意見を書いてしまったが、自分はこんなことを常日頃考えていたわけではない。この感想をきっかけに僕の考えを知ってもらえたら嬉しいし、この問題に興味を持った方はぜひ色々調べて欲しいと思っている。この感想文もかなりバイアスがかかっているため、ぜひ批判的に読むことをお勧めする。

西洋的な文化や風習がある一方で中国的文化が混ざっているこのカオスな香港が昔から大好きであり、今回の研修を経てもそれは変わっていない。むしろより一層好きになった。

「だって、中国語と英語が通じるってよく考えたらすごく不思議じゃないですか？それに、あんなにたくさん高層ビルがある一方でそこから数十分歩くともう自然の中。香港ってコンクリートの街じゃないですよ！」

昔と比べて語学力が向上し自立しつつある中、住んでいた頃に比べ香港で感じたことは予想外に新鮮なものばかりだった。job shadowing を経験して、海外で働くことの大変さ、やりがいなどを感じられたことは今後のキャリア形成にとって良い経験だったに違いない。今回の研修に参加しなければ出会わなかった方々と知り合えたのはとても貴重な体験だった。サマー・スクールにおいても、中国語も上達できたことはよかった。

自分の目標である、様々な経験をし、様々な人と出会い、様々な価値観を知ったことで、また一步視野を広げることができた。この短期研修に関わった方々、11人のメンバーにお礼を言いたい。ありがとう!!!

牛乳から香港の食とマーケティングを考える

馬場敦也

〈1. 牛乳から香港の食とマーケティングを考える〉

香港で生活する中で、食に関して驚くことが多かった。例えば、お店で見られる水がお湯または常温であったり、日本と違って米がとても細長く、乾燥していたり、店先の独特な香辛料の匂いだったり...挙げればきりがないように思われる。

私の中でも驚いたのは、牛乳が常温で売られていることだった。これについて考察する。



図1 日本の牛乳の棚



図2 香港の牛乳の棚

①なぜ牛乳が常温でも大丈夫なのか

まず、大量生産をする牛乳の殺菌方法には大きく分けて、63~68°Cの低温殺菌と75°C以上の高温殺菌がある。常温販売の牛乳は高温殺菌のなかでも殺菌力が高い超高温殺菌(120~150°C)を採用している。そしてパッケージも内側にアルミニウムを使用するなどし、密封性・遮光性を高めている。

だが、この超高温殺菌の方法は日本の牛乳でも取られている。違うのは、パッケージである。日本の牛乳の包装は、常温保存の牛乳の包装よりも密封性・遮光性が弱い。マーケティング上の戦略も関係する。日本で冷蔵の牛乳が多いのは、冷蔵のほうがおいしいと考える日本人が伝統的に多いことに合わせたマーケティングの結果であり、また、賞味期限を短くすることで購買意欲を高める狙いもある。



図3 香港でよく売られている牛乳

②なぜ牛乳が常温でなければならないのか

1,106 km²という狭い国土に734万人もの人口があり、耕地面積が国土面積の3.8%しかない香港は、食料を輸入に頼っている。

食料を輸入する上で重要なのは、輸送コストである。輸送コストを下げるには、賞味期限を長くしたり、品質管理コストを下げたりするのが有効である。

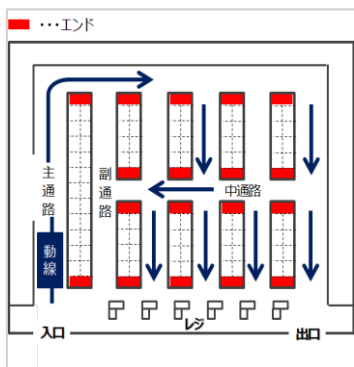
この牛乳の常温保存方法は、賞味期限が伸びるというメリットがある（パッケージや殺菌方法の都合上）。賞味期限が長ければ、速く輸送する必要性が低下する。遅くて安い輸送手段を採用するため、輸送コストを下げられる。また、もしも牛乳を冷蔵輸送すれば冷蔵の分だけ高い品質管理コストがかかるが、常温管理であれば、そのコストは省ける。

さらに、輸送後を考えれば、店先で売る際にも冷蔵保存のコストを削減できるほか、顧客にとって単純にも賞味期限が長いということがメリットとなる。

③香港でよく見るセールの仕方

このように常温で売られることの多い牛乳だが、もう一つ日本と異なると感じたことがある。それはセールの方法である。香港で私が購入していた牛乳は「二個買うと値引き」というものだった。ちなみに、通常で買うより約 60 円の値引きだった。他にもセールの仕方には「一個買うと一個無料（buy one get one free/ 買一送一）」というものがあつた。

私個人の経験ではあるが、日本のスーパーで「～個買うと値引き」、「～個買うと一個無料」



というセールはエンド陳列（図 4 参照）でよく見られ、広告で取り上げられることが多い。エンド陳列に配置されたり、広告で宣伝されたりするという事は、そのようなセール方法が通常ではなく、イベント性の高いことを意味すると考えられる。

一方でこのセール方法は、香港のスーパーでは、多様かつ多くの食品で採られていた。

食品の多くを輸入に頼り、(牛乳に限らず) 保存期間が長い食品の多い香港では、上で述べたような「多く買えば得」というセール方法は、有効なマーケティングであるといえる。

図 4 エンド陳列

④まとめ

以上のように、牛乳を例に香港の食品とマーケティングについて考えてみた。

香港の人口と農地の少なさが食品の輸入を余儀なくさせ、続いて、輸送コストや販売店・消費者利益の観点から、常温で長期保存可能な食品（主に加工品）が多く生き残ったと考えられる。また、そのような形態に適合して、より多くの商品を購入させるマーケティング方法が採られたのだろう。ただ、加工品が多い要因には香港の「家ではあまり料理せず、外で食べることが多い」という外食文化も深く関係することも事実である。

〈2. 香港研修を終えてみて思うこと〉

この研修に参加すると確実に中国語（普通話）が上達する。また香港で、広くは海外で働くことが、どんなものなのか肌で感じられると思う。

生活の中には牛乳についてだけではなく、様々な驚きがあった。特に、日本でしか生活したことが無かった私にはとても刺激的で、日本がどのような場所か初めて少し実感できた。香港だけでなく、世界各国の人と交流できたのも魅力であったと思う。

最後に、本プログラムに携わったすべての皆さんにお礼を申し上げたい。ありがとうございました。

〈参考〉

香港の耕地面積 (<https://www.globalnote.jp/post-2333.html>)

香港の人口 (<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/hongkong/data.html>)

牛乳の殺菌方法 (<https://www.nyukyoku.jp/dairy/?rm=4&qid=463>)

エンド陳列 (<https://www.fmsnet.co.jp/column/vmd/1047/>)

水を通して

石井遥菜

香港へ来て初めての食事を私は寮の学食でとった。メニューも読めず直感で購入したライスプレートとやっとの思いで手に入れた水。受け取った瞬間「あつっ！」と叫んでしまった。香港の水道水は安全ではあるものの、煮沸して飲むのが主流なのだ。暑い日に冷たい水が飲めない苛立ちを抑えながらも熱湯を飲んでみると、日本で飲む水道水とはずいぶん味が違った。味の説明は難しいが、私はその日以来学食でお湯をもらったことはない。とにかく香港での生活は水に悩まされた一ヶ月間であった。毎日寮のキッチンで緑茶を沸かすかミネラルウォーターを買って飲んだ。タピオカミルクティーを頼む際には氷抜きにした。ミネラルウォーターで口をゆすいでいたというのはここだけの話である。私は初日の体験に衝撃を受け、水に対してとても敏感になっていた。初めはシャワーヘッドから出てくる水でさえ、どこからくる水なのだろうと気になったり、水道水で顔を洗うこともためらったりしてしまった。私は何度か海外へ旅行に行ったことはあるが、生活は全く別物だということを思い知らされた。

ここで、外国で生活するには順応性が必要不可欠だと私は考えた。そこでは日本のように蛇口をひねってもきれいな水は出てこないかも知れないし、汚い水で顔や体を洗うこともあるかも知れない。食べ物に関しても、和食レストランがあるとはいえど、日常的に和食を食べることは難しい。様々なことを現地の人たちの生活に合わせなければいけない。この人たちはこんなにスパイシーなものを食べるのか、お水は沸かして飲むのか、日本と違って面白いなと考えるくらいの姿勢が必要だと考えている。普段と違う生活に戸惑い、文句を言っているような私は一生日本で暮らすしかないのだ。私は長期留学をしたいと漠然と思っていたが、簡単な話ではないと考えさせられている。

水についてたくさん考えた一ヶ月で学んだことは他にもある。発展途上国における水不足と水道施設の未整備がいかに深刻かということである。香港の水道水は WHO の基準を満たしていて安全な水であり、ミネラルウォーターも簡単に手に入る。そこですら私たち日本人は、水道水が美味しくないだとか安全面に不安があるだとか不満を言っているのである。なんと贅沢なのだろうと思った。帰国して、テレビをつけた時にあるテレビ CM が目に留まった。茶色く濁った水を飲もうとする幼女と「妹の命を奪った水。生きるためには飲むしかなかった」という文字だ。発展途上国への支援を呼びかけるものである。いつもならスルーしていたが、この子にも美味しい水を飲める幸せを味わって欲しいと強く思ってしまった。そして今、世界中で美味しい安全な水が飲めるようになるには私に何ができるのか、調べるところから始めている。学校の先生に言われたから、みんながやっているからといった理由で募金やボランティアをしていた自分と決別できた。

ここまで香港の水に対する不満を述べてきたが、香港での生活は楽しく快適なものだっ

た。地下鉄の本数はとても多く、バスやタクシーも利用しやすかった。香港の方は親切だと感じた。エアコンがとてもきいていて室内が寒いのも私にとっては心地良かった。一ヶ月というのは非常に短い期間だが、生活するという点においてたくさん学ぶことができる。お湯を飲むことやその味にここまで違和感を覚えたのは私だけだと思う。これほど水に執着する人もなかなかいない。しかし、全員何かしらの発見や学びがあることを私の体験を通して伝えたい。

文化の違いとそれを超える人柄について

林穂高

今回の研修では、初めての海外だったということもあり初めのうちはかなりホームシックになり、1ヶ月をとっても長く認識していた。しかし実際研修が始まるにつれ、慌ただしさやそれを上回る毎日の充実さにホームシックは薄れ、あっという間に一ヶ月は過ぎ、研修が終わった後はさみしさを感じるほどであった。それほど研修中のいろいろな方々との関わりが充実していたからであろうと今は思う。

ホームシックを強く感じていた最初の数日は、香港の文化や価値観の違いを強く実感した日々でもあった。研修以前は楽しみにしていたその違いから日本ではないということ強く意識してホームシックになっていた。電車内での電話や大きな声の許容、反対に飲食は一切禁止という身近な違いから、今まで食べたことのない料理や日本では経験したことのない暑さや湿度、エアコンの温度といった環境面の問題もあった。また大きな違いはやはり様々なところで見かけた逃亡犯条例へのデモやその参加人数の多さであった。日本ではここまでの規模にならないだろうし、ここまで熱意を持って持続的に行われることなどないだろう。大学に入って以降様々な地域から来た学生と関わる機会が増え、それだけでも大学以前の自分の世界の狭さを感じていたが、香港ではそれ以上にその狭さを自覚し、自分の視野が広がったように感じた。例えば、日本に来る外国人のマナーが悪いと問題になることがある。しかし研修中に私自身電車で飲み物を持っていたら注意された経験があったため、外国人がそのマナーを知らない場合もあると考えるようになった。そのように今回海外に行ったことで今まではっきりとは分からなかった「外国人」という視点の存在を認識できたことは、この研修の一つの大きな成果だと感じた。

ホームシックの落ち着きは、このように自らの視野の狭さに気づき、文化の違いを許容できるようになったことも要因の一つであったが、それ以上に研修の間、人に恵まれていたというのも大きかった。一緒に香港で研修を受けていた一橋大学の先輩や同級生、中国語研修で知り合った他大学の学生の方々は特にお世話になった。みんなユーモアがあり面白く、互いに心配することはあっても、気を遣いすぎることなく、絆の強い仲間のような関係を築いていて、そういった雰囲気のできる行動力やコミュニケーション能力をそれぞれが持っていることに尊敬を持った。ほぼ毎日みんな集まっていて仲の良さを感じた。

また、中国語研修の先生方、香港研修の先生方、CIEEの方々のおかげもあり、研修がより充実したものになった。全く中国語を勉強していない状況で参加したが、先生方はとても優しく発音など一人ひとり直してくれ、最後まで楽しく授業を受けることができた。先生方のおかげで中国語の勉強の楽しさに気づき、帰国後も中国語を勉強しようという意識が高

まった。また午後の授業の先生が最後の日に、「今度香港に来たときは私のところにおいで。今度こそビクトリア・ピークを案内してあげる」や「みんなの香港のお母さんだから」などと言って、声をかけてくれた。デモの関係で香港に来る友達の様子を心配していたときも、空港の状態や気をつけることなどを教えていただき、とても心強かった。そういった人への気遣いや心配りは、国や文化によって変わることはないのだなと強く感じた。



* 中国語研修でのクラス写真

帰国するにあたって、空港でのデモの情報などもあったが、先生方や CIEE の方々が対処してくださったため、あまり不安を感じることなく無事に帰国することができた。また研修中も友人から安否を尋ねるメールや電話がいくつも来て、友人たちの優しさを感じた。日本時間で遅い時間となっても電話して話を聞いてくれる友人の存在のありがたさに研修中は気づけなかったが今はとても感謝している。

今回の研修では、異文化に触れて自分の視野を広げるという目標を達成できた上、さまざまな人との関わり、その大切さを改めて実感した。陳腐な表現だが、人の優しさや人柄はどんなところや状況であっても変わることがないのだなと思う。今回の研修を生かして今後留学する際や留学生と関わる場合は“外国人”の視点からみて何をすべきか、あるいは何ができるかを考え、行動したい。また日々の生活の中での、何気ない人との関わりを大切にしていきたいと思った。

言語について香港で感じたこと

春名陽

・プログラムの Level 4 の授業についての感想

まず、初めに中国語学習歴を書いておく。中 3 の総合学習の時間で第二外国語として中国語の勉強を開始し、高 3 まで続けた。週 100 分の授業のみで予習復習なし。高 2 から高 3 の春休みにかけて、交換留学として、6 週間北京や上海に滞在した。その留学前はそれなりに勉強した。大学入学後、適当に自習し、1 年の 7 月に HSK4 級 (听力 80 阅读 94 写作 87)、9 月に HSK5 級 (听力 50 阅读 83 写作 57) を受けた。秋冬学期に中国語中級 (作文) と (会話) を取り、また 2 年の春夏学期に上級 (作文) を取った。

最初 Level 3 で申し込み、CUHK 側から自分に合うレベルはないと言われていたが、太田先生が交渉してくださったお陰で Level 4 が開設された。この時、プログラムを辞退する手続きを踏んでいたところだったので、CIEE の関係者、太田先生には本当に感謝しています。

8 月 5 日のオリエンテーションで、Level 4 では文法を勉強しないことを知り、かなりまずいと思った。というのも、的の使い方や、方向補語の使い方、その派生義、構文等に知らない項目が多くあったためである。しかも、オリエンテーションで隣に座った人が Level 4 だったので、中国語で会話してみようと思ったら、全然できないじゃないか!!! 聞き取れない、話せない、のだ。

授業が始まっても、聞き取れない。全部ではないがそれこそ 1 割くらいだろうか。教科書を見ると知っている単語が新出単語扱いされている。これでも一応適正レベルなのかもと思った。自分はレベルを変えたくなかったため、結局そのまま Level 4 で学習し続けた。言っていることがわからないため、とりあえず単語を勉強したが、あまり効果はなく、先生からディクテーションをして、教科書の段落を 1 つ覚えなさいと言われたため、実践した。しかし、それでも聞き取れたのは 6-7 割だった。同じクラスの人の発言は 3-4 割程度しかわからなかった。

私の問題なのだが、みんなが楽しそうに街を観光している中、寮で勉強し続けることは正直苦痛であった。そのため、中国語プログラムが始まってから 2 週目で自習時間が減った。そのまま継続して勉強し続けるべきだったのかどうかはわからないが、ともかくこのため能力の伸びは小さくなってしまったと考えられる。

最終的には一応、自分の言いたいことがちゃんとした中国語でなくとも、また相手が言っていることを想像しながらでも、ディスカッションはできるようになったと思う。ディスカッションができるようになったかなと思い始めてからは、とても会話が楽しく感じられたので、よかったと思う。加えて、日常生活で人から褒められる機会が想像以上にあったのは驚きであった。

・香港の言語について

広東語と英語しか通じないと思っていたが、普通話も通じることの方が多かった。確かに通じない人もいるにはいるが、自分たちが接するだろう人のほとんどは普通話に通じると思われる。私たちが接する人たちは大抵観光客相手に商売する人たちか、大学内で従事する人たちである。彼らが本土の人と接する機会も多いだろう。

書籍上の文字についてだが、香港中文大学の学生会発行の雑誌には広東語の文章もあったものの、基本的に普通話の繁体字と考えて差し支えない。什(shén)の代わりに甚(shèn)が使われているなどたまに字が違うこともあるが、普通話の本が読めれば、普通に読める。

また、深圳からの帰り、駅の呼び名について疑問点を持ったので、それについて考察する。以前私は北京に行ったとき、駅の名称について次のように理解した。地下鉄の駅は地铁站、在来線の駅は火车站である。地下にあるかどうかは関係ない。中国本土(他の地域も同様だろう)都市には西武や東急といった私鉄は存在せず、一つの地下鉄会社は地铁を運営して近郊輸送にあたり、在来線は都市間輸送にあたる。

中文大学から香港の中心街へ行くとき、MTRの路線図を見る限り他の路線との違いがわからない東鉄線に乗る。しかし、東鉄線の駅へタクシーで送ってもらうとき、私はずっと地铁站と呼んでいたが、通じたのは同乗者が発してくれた「火车站」の方であった。東鉄線はMTRではあるものの、元は本土と香港を結ぶ路線であり、2007年に香港の地下鉄会社に運営権が委譲されたものである。今でも本土との直通列車は走っている。中文大学の雑誌では大學站を火车站と表記していた。また、同行していただいた楊さん曰く「(東鉄線を)電車と呼んでいる」とのことだった。運営会社の乗換案内では港鐵站である。

考えられるのは、東鉄線は地铁ではなく火车であり、楊さんの訳は単に日本語に相当する訳語が地下鉄ではないため電車という訳にただけだということだ。運営会社で呼び名を決定しているわけではなく路線の性質・歴史から火车であり、それが今でも続いているというだけだろう。今後直通列車がなくなったり、時代が流れたりしたら呼び名も変化するだろうか。現状は、街中で駅がどこにあるか聞くときは東鉄線とそれ以外の路線で使い分けた方が誤解を減らせるだろう。

調べてみたところ、百度百科では火车と呼ばれているとあった。また、これに関して考察する記事では、地铁と火车(東鉄線)の区別はあるとの記述はあった。

<https://baike.baidu.com/item/%E6%B8%AF%E9%93%81%E4%B8%9C%E9%93%81%E7%BA%BF/23311635?fromtitle=%E9%A6%99%E6%B8%AF%E4%B8%9C%E9%93%81%E7%BA%BF&fromid=3106697>

<https://www.piaopaihk.com/Article/detail/bXspX7rzZX>

・デモを見て、自分の言語を見て

香港中文大学内にも街中にも寮内にもデモ関連の張り紙がたくさんあった。ところで、8月にいつからか寮のエレベーターに日本語で警察隊がデモ参加者を警棒で殴った、など政

府に対する不信を示す張り紙が貼られ始めた。そして、それは私たちに向けてのものであったのか確認すべきであったと思う。なぜなら私たち以外にそのエレベーターを使う日本人はいなかったからである。

では、自分がなぜ確認しなかったのか。日常会話は楽しめたあたりを見ると、多分自分が使う言語への信頼の欠如があったと思う。誤解が生まれたら、大変であるという思いがあったのだろう。確実な意思疎通をするときには、やはり一定の自信は必要だろう。中国語がいくらできても、話さないやつはできないやつと同じなのかもしれない。スムーズな意思疎通ができたとは言えないが、中国語を使った日常会話ではあまり困った印象を抱かなかった。というよりもわからなくても大した問題にはならない。政治的な話については誤解を生むのが怖くて、自分もデモについて意見を持っているわけでもないのに、どうもこの話題を避けてしまった。人の考えに入り込むためには言語が必要だし、自分にとって最も面白く追求すべきなのは土地の人の思考であったはずだ。

香港の言語事情と五大訴求

山口悠作

私が香港に来る前に聞いていたのは、香港はまず広東語が母国語であり、二番目に英語、三番目に普通話に通じるということだった。広東語というのは普通話と比べると、ほとんど別言語と言っていいほど異なる。実際香港に行ってみると町中から聞こえてくるのはほとんど広東語であり、全く何を言っているのかわからない。英語は思ったよりは話されていなかったが、ほとんどの市民は英語で話しかけるととても流ちょうに英語で返してくれる。日本人は英語で話しかけられることに身構えてしまう人が多いが、やはり香港には英語が日常生活に浸透しきっている印象を受けた。イギリスから長期にわたって植民地支配を受けていた歴史的な影響だろう。

つぎに、町中を歩いていると普通話が時々聞こえてきた。おそらく中国から来た旅行者か、移住してきて長年滞在している人たちだろうと思った。現地の人によると、1997年の香港返還あたりを境にして学校で普通話を教えるのがカリキュラムに組み込まれたため若い世代は英語も普通話も話せるが、上の世代は、英語は話せるが普通話はわからないという人が多いらしい。実際、私がジョブ・シャドーイングでレジの手伝いをした年配の女性は普通話が得意では無かった。その理由を聞いたところ、以上のような事情を広東語なまりの強い英語で説明してくれたのだ。

しかし、私が滞在していた和聲書院の受付担当で同じくらいの年齢の女性は英語が苦手な普通話で得意だった。なぜこのようなことが起こるのだろうか。おそらくこのような人たちは香港人ではなく中国から移住してきたのだろうと推測する。最近では1997年の香港返還から2009年までの間に62万人が中国から移住したようだ(香港特別行政区政府による)。それ以前だと天安門事件、文化大革命など大きな社会的混乱が起こると香港に移住した人も多い。香港と中国本土の違いは文化的なものも顕著だが、中でもイギリス統治時代に培われた魅力だったのだ。中国に返還された後も「一国二制度」の下で自由が維持されてきた。

しかし今、そんな自由だった香港が中国に飲み込まれようとしている。この不安定な情勢を受けて、自由を求めて香港から他の国に移住する人が増えている。しかし、考えてみれば、デモというのは政府に抗議し、それを内外にアピールするために道路や空港を占領して経済にダメージを与えるものであって、市民にも迷惑がかかるし、暴力的で過激なものになれば観光客も減る。実際私も旺角(モンコック)でデモに遭遇し、危険だと判断して行きたいところに行けなかった。そのとき、商店を経営する人は損害を被るし、交通が封鎖されることによる経済的損失も大きいだろうと思った。より深刻なのは、デモ隊と警察との武力衝突で無抵抗の市民が、ひどい場合には妊婦や子供が被害を受けることだ。命を奪われた者もいる。なぜここまで深刻な損害を香港にもたらしてまでデモを続けるのかというと、一つ目に、自由は右に述べた短期的な利益よりも重視すべき長期的な利益だからだろう。なぜ香港人

がこれほどに自由を重要視しているのかと言うと、自由な香港が彼らのアイデンティティであることが大きい。これはデモの参加者のマジョリティである20代に顕著だ。彼らの親世代の多くは自由を求めて香港に移住してきたから、自由を求めるならば香港以外の自由な地域に行けばよく、わざわざデモをするインセンティブはない。しかし20代は香港に生まれ香港で育ってきたので故郷から自由がなくなること強い拒否感を覚える。もうひとつの理由は、デモが自由を標榜するための唯一の手段だからだろう。ここまでデモをやっても政府は強硬姿勢を崩さないのだから請願書を政府に送ったくらいでは何も変わらない。

私は香港中文大学で「五大訴求、缺一不可（五つの要求、ひとつも譲らない）」のスローガンを何度も目にしてきたが、留学していた時はそれがどんな内容なのか、なぜこの5条が標榜されているのかには気を配っていなかった。以下のように内容を見ると、このデモの目指すところが香港の民主化という、現状とはほど遠いところにあり、香港の人々は長い戦いに身を投じる決意をしていることがわかる。

- (1) 「逃亡犯条例」改正案の完全撤廃
- (2) 独立調査委員会の設立と警察による暴行責任の追求
- (3) 抗議者への監視や検問の停止と撤回
- (4) 6月12日に行われた集会を「暴動」と位置づけたことの撤回
- (5) 普通選挙の実現

(1) に言う改正案は中国政府が香港人を中国司法で裁くことを可能にし、法分野における一国二制度の崩壊を意味するものだった。2019年9月4日に香港政府から逃亡犯条例改正案の正式撤回が発表された。しかしこれが撤回されたことによって香港人の自由が保証されたわけでは決してない。中国共産党が直接香港の人々の自由を侵害する懸念はなくなったが、香港政府は中国共産党の傀儡であり続けるため間接的に自由を奪われ続ける。

(2) は警察組織を刷新するよう求める条文である。香港警察の問題点は、無抵抗の抗議参加者に容赦なく発砲したりバイクでひき殺そうとしたりするなど、明らかに過剰な武力行使をしていることにある。必要な範囲を逸脱してデモ参加者に危害を加える残忍な警察が香港を支配し続けることは自由を求める市民の人権が不当に侵害されることを意味する。

(3) (4) はデモ行為自体が自由を訴えるための正当な手段であると認めるように要求した条文であると見ることができる。政府非公認のデモは違法集会として刑事罰が課されるので、デモを公認するよう要求していることになる。

そして、(5) は最も通しづらい要求である。なぜなら香港歴史上普通選挙が実現したことはなく、2014年の雨傘運動でも頓挫したからだ。加えて、香港基本法における普通選挙に関する条文の解釈権は全国人民代表大会が握っており、普通選挙を認めれば中国共産党の意向が全く通らなくなることを見越してこれを断固として認めないだろう。

この考察を経て、香港が泥沼の時代に突入していることを実感した。

香港という街について

角田友佳子

私が今回の研修に参加しようと思った大きな理由は中国語学習を集中して行うことができるからであり、香港で行うという部分については深く考えていなかった。しかし今ではこの研修が香港でよかったと思う。もちろん中国語学習については、一日にあのように中国語に触れて話さなければならない環境に自分を置く機会はめったにないと思うのでとても良いものだった。そしてそれと同じかそれ以上に、香港という場所で一か月過ごしたことは自分にとって意味のあるものだった。

私が今回の研修で感じたこと・学んだことは些細なものも含めると数えきれないほどある。それらは生活していて感じたこと、この研修のメンバーとの会話の中で得たもの、香港の方と話して感じたものなど様々であるがどれも私の考え方・ものの感じ方に影響を与えた。香港研修の一か月間は、一日一日にそれぞれ思い出があり、こんなにも濃い一か月を過ごしたのは初めてだった。香港には幼いころ少しだけ住んでいた経験があったが、親に手をひかれてしか街を歩いたことがなかったため成長した今自分一人で見えた香港は全く別のものであり、非常に新鮮だった。日本に帰ってきた今思い返すと、香港にいたときの一か月間の自分は日本で生活している時と比べると多少アクティブさ、積極性があったのではないかと思う。それは香港に行って自分が変わったというより、香港という街に影響された結果であり、日本で生活しているには維持できないものだろう。

言葉で表すと薄っぺらいものになってしまう気がするが、香港という街は日本に比べて勢い・スピード感があって、パワフルだった。物理的にもタクシーは飛ばすし、エスカレーターもものすごいスピードだが、街の空気感が日本とは異なっていたように個人的には思った。日本の中でも都心であれば多少せかせかせした空気感、人の多い感じなどはあるが、香港は都心のせわしなさは少し異なった、少し気を抜いていたら置いて行かれてしまいそうな、緊張感のようなものがあつた。そう感じたのは私たちが外国人として、そのうえただの旅行ではなく、短期間その土地で自分たちだけで暮らす身として過ごしていたことや、デモやストライキが頻発する特殊な時期に行ったことによる、常に完全には安心しきれない状態であったことも要因の一つだと考えることができる。しかしそれだけではないだろう。

何が要因となっているのかははっきりとはわからないが、自分なりに考えてみると、まず中国という大国と陸続きにつながっているながら、異なる制度の下、生活している香港の人々の中には、全員とは言わなくても「中国に飲み込まれてはいけない」という気持ちを抱きながら生活している人が多くいるのではないだろうか。その気持ちを常にはっきりと自覚していたり、表に出したりしている人は多くはないのかもしれないが、日本と比較したときに、「隣り合う大国に乗っ取られる」という可能性が全くない日本には全体的に香港に比べのんびり、とかゆったりとした空気が流れているように思う。どちらかが良い悪いという

ことではないが差はあるように感じる。

また、その「香港を守らなければならない」という意識からくるものなのかはわからないが、自分の人生のことを自分の頭で考えて行動に移している人が多く、その影響もあってか、ずっと変わらず同じ場所に留まること（地位や仕事において）よりも、変化し続ける、動き続けることを志向する人が多く、そのことが香港全体の、日本にはないエネルギー感・スピード感につながっているのか。また、香港という小さな国が世界の中で生き抜いていくためには、常に変化・進化していかないといけない、という現状が人々にそうさせているのかもしれない。企業研修の際にお世話になったかね善の香港人の社員やインターン生とお話した際には、自分と同年ながら、すでに自分のこれからのことについて、しっかりと考えがあり、そのために、実際に行動に移すことができているインターン生や、これまで転職してきた経緯に、自分の将来のことを見据え考えてきた結果を窺うことができる社員に、今の自分にはないものを見ることができた。かね善香港で働く日本人の方も「香港で生活していて街のエネルギー感・勢いはものすごく感じる、こちらが何かあって落ち込んでいたとしても落ち込んでいる暇さえ与えてくれないほどだ」とおっしゃっていた。ほんの数人の方と話した結果であるから断定はできないが、香港の人々は転職をよくする（転職に対するハードルが低い）という話から考えても、やはり香港に暮らす人々は自分の将来のことについてよく考え、そのためにすぐに行動する傾向が強いのではないだろうか。

香港の街で生活している時は、周りの空気感に影響されて自分も少し変わったように感じたが、日本に帰ってきた今元の自分に戻りつつある。そのことを悪いことだとは思わないが、不思議なことだと思う。街の空気感が人の内面に影響を与えることがあるのだ。このようなことを実感したのは初めてだった。ただ個人的には、ずっと香港で暮らすことは精神的にとっても大変なことだと思う。香港で暮らしていくには香港の勢いに置いて行かれないよう、負けないよう自分を強く持ち続けなければならないからだ。

きっと、それぞれの国には、その国・街なりの、そこで暮らす人々が作り出す空気感があって、ある程度の期間、そこで生活することで、その空気感を感じることもできるのだろう。香港での一か月でそのことに気づくことができた。たった一か月といってしまうとそれまでだが、この一か月は私にとって意味のある時間だったと思う。

言語を学ぶということ

栗田寛樹

香港では中国語も英語も公用語であり、その香港で研修できたおかげで得ることができた、自分にとっての言語に関しての大切な示唆について書く。結論から述べると、この香港研修を通して「言語力が自信をもたらし、他文化での行動範囲や行動の自由度を向上させる」ということを強く実感した。というのも、今回の研修は、私にとって2回目の短期海外研修プログラムだったのだが、2年前に初めて参加したマレーシア・シンガポール研修で語学力のなさ故に自分を発揮しそこなった苦い思い出を、今回、語学力の向上によって塗り替えることができたと思えたからである。

マレーシア・シンガポールでの研修は、主に英語を用いて現地の文化やビジネスについてインプットとアウトプットの双方を重視しながら学ぶものであったが、当時の私は言いたいことや質問したいことがあっても反射的に話すことができずに、学びのタイミングを逃してしまうことが何度もあった。そして今回は、その悔しい思いをした研修から日本で留学生と約1年半一緒に寮生活を経ての香港訪問であった。結果としては、今回の研修時には自分でも驚いてしまったほどに、着実に英語の能力は向上しており、**Job Shadowing**では前回と比べて確実により流暢に英語で受発信できたし、お土産街では英語で自信を持って値切りをでき、とある後輩のスマホ騒動では警察に落ち着いて英語で説明できた。

もちろん、これまでも英語は不得意だったわけではなく、むしろ高校生の時から得意分野であった。しかし、それはいわゆる受験英語としての英語能力であり、日常会話におけるコミュニケーション能力とは異なる。この2つの種の英語の大きな違いは、目的の違いだ。受験英語は正解に合致しているかどうか重要だが、日常会話の英語は、相手に自分の主張を伝えることが、その最も大事な目的になる。もちろん、これは優先順位の話であり、受験英語でも、例えば英文を作る際には、なるべく日常的に自然な英語を書くように努力すべきだし、日常会話の英語でも間違いを全く気にしないのは、その後の成長に繋がりにくいという点で避けるべきことだ。

しかし、いわば受験英語としての英語を実践しようとしていた過去の研修と、今回の研修で得られた知識や経験のインプットや自分の意見を発揮できたアウトプットの量の差を鑑みると、これらの最終的な目的をきちんと認識することは、自分が考えていたよりも遥かに自分の人生を豊かにするようであった。それは、相手との意思疎通という最終目的を常に意識できていたおかげで、前回の研修で周囲の英語力に圧倒され、せつかくの海外の地でただ悶々としていた時間も、今回の研修では、したい行動を実践する時間に充てられていたからだろう。

ここまで英語について触れてきたが、振り返って中国語は、まだまだであることにも同時に気付かされた。自分の言いたいことは半分も言えなかったし、相手の言いたいことは、そ

もそも相手の発言の中に知らない単語があると意味すら理解できなくなった。今後は、単語を覚えることを中心に中国語の勉強に励んでいこうと強く心に誓いたい。

また、今回の研修内では、6日目にショッピング・モールで目にしたのを皮切りに、幾度となく見る機会があったデモ活動においても、言語というものの重要性を認識した。デモの参加者のように、何かを主張するのにも言語は欠かせないのだが、デモのメッセージを自分の耳でダイレクトに受信し、自分が中国語を勉強してきたからこそ感じ取れるニュアンスを受け取るのにも言語というのは必要だった。いずれにしろ、結局のところ言語は、人間活動を支えるツールなのだというを深く実感した。

最後に、実は私には言語やビジネス・文化体験といった目標以外に、今回心に秘めていた目標があった。それは、前回のマレーシア・シンガポール研修のように、今回の研修も2年経過しても、当時の高学年の先輩を中心にまだまだ同窓会が頻繁に行われるような関係を作れること。その研修で活躍していた4年生の先輩方は皆魅力的で、自分や他のメンバーも2年経った今でも頻繁に会いたいと思う存在である。今回4年生となって研修に臨んだ自分も、またその先輩方のように2年後にも会いたいと思ってもらえるような人になれていたら嬉しい。みんなありがとう。

肌で感じた香港生活

安永殷

・デモ

香港のデモをみて疑問に残ったのは、参加する人達の中で本当に自分が意義をもって参加する人は少ないのではないかという点である。香港のデモは規模が大きくて、私たちの日程にも様々な影響を与えた。デモで電車が止まってしまうので予定よりも早く寮に戻ったり、デモのため観光の予定を先にしたりした。他大学の中では、デモのため企業研修がキャンセルになり、予定よりも早く日本に戻ったところもあった。特に、最終日の日に空港に行く道でデモが予定されたため、デモが行われる前に空港に行き10時間以上ひたすら飛行機を待っていた経験はなかなかないことであると思う。

香港のデモは、このように非常に大規模であって、多くの香港の人達が参加したものであった。特に、学生達が大人数で参加し、香港中文大学の学生達もデモに参加している姿が見えた。大規模で自分たちの意見を主張するのは、民主的な活動だとみられるかもしれない。しかし、私が香港中文大学に実際に1か月間住んで、現地でデモに参加する学生達を見ると、抗議を真面目にやっている学生が少ないのではないかといった印象が残った。意識が高い人に見られるために参加する学生、ただ単純に友達に参加するから自分も付いて行くといった学生達が多く、今回のデモについて深く考え自分が参加する意義を考えずに参加している傾向が見えた。デモに参加したという言い分で夜遅くまでパーティをし、昼頃に起きてまたデモに参加する、といった生活を繰り返しているのを見て、果たしてそれが健全なデモであるのか疑問になった。

私の母国である韓国でも、私が日本に留学している間、大統領に対するデモやいろんな政策に対するデモが行われていた。今回の短期研修で香港のデモをみて、韓国でも上記の学生達のような人がいるのだろうと思った。もちろん、そのような意識であっても参加しているからこそ、デモが大規模になり、香港や韓国のデモが他国にも知られるようになり、デモが良い方向に向かうことになるといった点もあると考えられる。しかし、ある特定の意思を持った人が集まって、その意思を伝えるといった本来のデモの目的を考えると、正しいことではないだろう。また、今回のデモをみて、デモでなくても、自分も何らかの活動に参加する時、なぜその活動をするのかきちんと意識して参加しようと思った。

・香港の人

香港の町は、人が多くにぎやかである。思ったより英語も普通語も通じない人が多かったのでコミュニケーションは難しかったが、香港の人たちはみんな親切であった。それに関するエピソードがいくつかあって、まずレストランに行った時である。お店に入ったが、英語も普通語も通じなくて、メニューから注文するのに困っていた時があった。その時、店員さ

んが優しくジェスチャーでゆっくり説明してくれた。エビワンタンメンを頼んだが、頼んだ後には、ワンタンメンを美味しく食べる方法や調味料などを教えてもらった。また、企業研修に行った時には、研修の担当でもない方から香港の記念品や観光スポットなどを紹介してもらったり、その方が名刺を渡しながら、また今度香港に観光で来るときに連絡すれば、香港の案内をしてくれると言ってくれたりした。

このように、自分が肌で感じた香港人は他人に対する距離感が近く、すぐ仲良くなれる人であった。研修に行く前は香港の人たちは気が短く、せっかちだというイメージを持っていた。しかし、実際に香港で現地の人に会ってみると、イメージとは全く違ったのである。いつも自分は、他人に対し偏見をもって接することはないようにしていたと思っていたので、香港人に対する偏見を持っていたことを反省した。どの国、どの団体に対しても最も重要な事は、実際に行ってみないと、その人達を十分に分かることが出来ないということだと思った。

香港で生きる人々から学んだこと

石井湧介

今回の研修で香港を訪れたことによる学びは多岐にわたり、大きく、香港の政治事情、異文化との接触、語学の三つに分けられる。私のエッセイでは、この三点について述べていきたいと思う。

まず、香港の政治事情について述べていく。香港に到着した翌日、香港日本人商工会議所訪問のために銅鑼湾に行った。そこで目にしたのは大量の黒い服を着た人々であり、気づいたときには周り一帯がデモ参加者で埋まっていた。香港に着いて間もない時期であったため、その異様な熱気に驚いたが、考えてみれば留学期間中は、ずっと至るところでデモが行われていた。学内、特に寮内でも学生達がデモの準備をしており、日本人は我々しかいないにもかかわらず、日本語のデモ呼びかけポスターが貼られているのを見たときは、自分たちも意識されていることを認識し、もはや他人事ではないと感じた。私がデモに関することで最も印象を受けたのは、今回の研修に携わっていただいた香港人の **Ronald Yeung** 氏のお話を聞いた時である。Yeung 氏には深圳への **Job Shadowing** にも同伴いただいたため、その時に様々なお話を聴かせていただいた。Yeung 氏はデモの抗争へ向かっていく若者を見るのが非常に悲しいとおっしゃっていた。デモに参加する学生達はちょうど Yeung 氏の世代の人々の子供にあたるらしい。しかし同時に、香港の状況を変えるために抗議している若者達は勇敢であるとも感じているようだ。考えてみれば、日本人と香港人を比較してみると、国の未来への関心の持ちようは大きく異なっていると思う。国の未来を真剣に考え、自分たちで変えていこうとする姿は、主体的に人生を切り拓く力に満ちていたと思う。暴力が付きまとう凄惨な出来事であるが、香港の人々が望む未来が訪れて欲しいと強く感じた。

次に異文化との交流について述べていく。この研修を通して実に多くの人と出会うことができ、この出会いこそが私の研修の大きな成果であったと思う。まず母国を離れて働くことを選んだ人々に多く出会うことができた。**Job Shadowing** で訪れた **ChoEi** の川副社長、田名部氏、深圳の工場で働く香港人の **Carl** 氏、第一電材株式会社の須藤氏、そして Yeung 氏等々、挙げていけばきりが無いほど多くの人に出会うことができた。彼らからは、海外で働くことの素晴らしさと苦勞を教えていただいた。海外で働くことの利点で多くの人が語っていたのは、日本の会社の中で働いているときよりも、海外で働いているときの方が自分に裁量が多くあるということだ。海外で働いているときの方が責任は多く伴うが、その分自分ならではの仕事ができると語る方が多くいた。自分にしかできないことを見つけるには海外で働くということは良い選択肢になるのである。一方、海外で働くことの苦勞も多く知ることができた。言葉が通じないことによる問題や衣食住の問題はもちろん、ゼロからチャネルを築いていくための地道な気遣いや地域の情勢にアンテナを張っておくことなど、海外で働くことは常に学習と努力の連続であるということも教えていただいた。また、彼らの

多くに共通していたと感じたことは、自分の将来と国の将来を関連付けて考えている人が多くいるということである。母国以外の国で働くことをあえて選んだ人々ならではの視点であると感じたが、受動的に母国を選ぶのではなく、国の未来を考え自分が生きる国家を主体的に選択することもできる、ということについて身をもって教えていただいた。

人との交流について追加で述べると、海外の学生達との交流も今回の研修における重要な点の一つであったといえる。香港中文大学の学生はもちろん、他の国から同じプログラムに参加していた学生と話す機会も多くあった。彼らと交流すると、日本人との違いが多く見えてきて、今まで自分が信じてきた常識が案外取るに足らないものであった、ということに気づかされた。特に、会話をするときの態度に関しては、価値観が大きく広げられたと思う。日本では、親切・丁寧・消極的という態度は承認される態度であるが、香港や欧米の学生と話ときは、消極的であることは良い態度であるといえない。どのような人と話すときも会話に積極的に興味をもつということが、重要な態度として尊重されていると感じた。

最後に、語学に関して述べていく。今回の研修の中で、最も大きな収穫の一つといえるのが、自分の英語はほとんど通用しないということの発見であった。来年の夏から長期留学を行うことが内定しているのであるが、その前にこのことを知ることができた意義はとて大きいと思う。伝えたいことがあっても、伝えるための言葉が出てこないことを何度も経験した。もしここで伝えることができれば、もっと良い結果が訪れていたのに、と思うことが多く、語学力によって自分の可能性が狭まってしまっていることを肌で感じた。この状況を来年の夏までに変え、今回の教訓を次に活かすことができれば今回の研修の意義が改めて素晴らしいものになると思う。

今回の研修は 1 ヶ月の研修であったが、自分にとって初めての留学ということもあり非常に学びの多い研修であった。中国語に関しても、CUHK の教員達の丁寧な教えと 3 週間の集中的学習のおかげで、当初の想像以上の力が身についた。この研修に携わっていただいた太田先生、田口先生、ChoEi の方々、Yeung 氏、CUHK、そして 11 人のメンバー全員への感謝を忘れないようにしたい。

外国語を話せる能力は必要か

田村草太

語学力は収入面に好影響を及ぼすため、収入を上げるための手段として必要であるということが、今回の研修から学んだことである。本研修から語学力は高学歴の人たちに備わりやすいことが分かった。また、一般に高学歴の人たちは通常よりも年収が高い傾向がある。それは語学力が優位に働いているためだ、という仮説をもとに以下で述べていく。

本研修以前に海外へ一回も赴いたことがない私に関していうのであれば、中国語はおろか英語さえもほとんど話すことができない。そんな私でも 25 年の歳月を何ら不自由なく過ごすことができた。勿論、日本においても英語を話せることができたなら便利だ、と思う場面はたびたびあった。しかし、生活をしていくうえで絶対に必要かといわれれば、私にとっては必要なものではなかった。反対に世の潮流は語学力を必要としている。例えば、ビジネスパーソンに必要な三種の神器において、財務（会計）、IT に続いて英語力が挙げられる。また、2020 年に開催予定の東京オリンピックにおいて、外国語を話せるスタッフが 8000 人から 12000 人必要とされている。この数字は様々な役割の中でもアテンドという役割だけに絞っているので、実際にはもっと多くの外国語話者が必要とされるだろう。その他、大学受験で英語のスピーキングを取り入れるという変化もある。さらに多国籍企業や海外からの旅行者も増加している。このような様々な側面から英語をはじめとする多言語話者が必要だと考えられている。

それでは、今回の香港研修での体験から外国語の必要性を考えてみる。香港研修で外国語を使う機会、は他の国と比べると非常に少なくて済むのではないかと考える。もちろん、これには周りに日本人学生が多かった点も大いに関係する。しかし、例え日本人が周りにいない状況であっても、外国語を話すことなく生活できる、というのが正直な感想である。理由として、香港は通信や交通などの基本的なインフラが非常に整っているため、ネットが発達した今日において、外国語なしで問題解決が可能である。また、香港には日本語の理解がある人たちが多くいて、そのおかげで英語や中国語を話す必要が少なかったという点もあった。例えば、Job Shadowing 先である ABC Cooking Studio の従業員も半数以上のスタッフが日本語を話すことができていた。また、我々が滞在していた香港中文大学でイベント運営をしていた学生ボランティアも、その 8 割が日本語を理解していた。他にも偶然入った飲食店の従業員も日本語を話せる場合が少なからずあった。このような理由から、香港は他の国と比較したときに日本と似た環境であるといえる。そのため語学力がなくとも十分に楽しむことが可能である。ゆえに生活するだけならば他言語の必要性は少なかった。なお、香港は海外の中でも日本人にとって生活しやすい国であるものの、通信インフラが整っているのであれば他国でも言語なしに生活することは可能であると思われる。

それでは英語などの語学力は必要ないのかということとは言えない。確かに生活がで

きることを前提にすると、ある程度の環境さえ整っていれば特別な語学力がなくとも生きていくことは可能である。しかし、高収入を得るという側面からみると語学力は必要になると考えられる。今回そのように感じたのは、香港研修に来ていた学生が比較的知的水準の高い層であることが関係する。一橋大学をはじめ、京都大学、東京外国語大学、上智大学、立教大学、明治大学、南山大学などの難関大学である。私自身が彼ら日本人学生と交流して感じたことは、個人間で程度の差はあるものの多言語で会話できる者が多かったということだ。彼らの多くは、積極的に海外の人々と英語で交流をすることができていた。なかには中国語やフランス語で会話するものもいた。彼らが多言語を話すことができる理由は、厳しい受験戦争で鍛えられてきたことや親の転勤が多く海外経験が一般よりも豊富であるなどが挙げられる。しかし、理由はさておき、概して一般水準より多言語の習得が進んでいる。以上より難関大学の学生は多言語の習得率が高いのではないかと考えた。

そのような彼らが所属する大学の卒業生の平均年収は高い。Doda のデータによると国内総合大学の年収順位において上位 30 校に 4 校（京都 2 位、上智 13 位、明治 19 位、立教 28 位）が入っている。単科大学を含めても上位 50 校に 5 校（一橋 5 位、京都 8 位、上智 34 位、明治 45 位、東京外国語大学 49 位）が入っている。しかし、英語などの語学力とは全く関係なく年収が高いということも考えられる。そこで次に（株）キャリアインデックスのデータを参考にする。同社の調査によると、年収 700 万円以上の人は約半数（48.7%）が英語での日常会話や読み書きができる。年収 500 万円から 700 万円未満の人では 34.0%、年収 500 万円未満では 22.4%とある程度の相関関係があることがわかっている。また、転職市場においても TOEIC などの英語能力を測る試験のスコアが優位に働く場合が多い。Doda の調査によると、TOEIC テストを受けていない人の転職成功率を 1 とした場合、受けている人は、男性が 1.22 倍、女性は 1.26 倍といずれも高い数値が出ている。職種別でも IT 系エンジニア以外のすべての職種で優位に働いている。これらの結果から英語をはじめとする言語能力は、自身のキャリアアップに有利に働き、年収を伸ばすことが推測できる。

香港研修で知的水準の高い学生たちと交流して、そのような層の学生たちには語学力が備わりやすいことを目の当たりにした。さらに、彼らの通う大学の卒業生平均年収は比較的高い。また、英語をはじめとする語学力が、キャリアアップに有利に働き年収などを上げる要素の一つであることがいくつかの調査から明らかになっている。これらのことより高学歴の学生には語学の素養があり、そのことが彼らのキャリアに有利に働き年収を上昇させているのではないかと推測できる。論理の飛躍はあるものの、自身のキャリアに語学力の必要性を感じた有意義な研修であった。今後も本研修を活かし、語学学習に邁進したい。

【参考資料】 2019年8月30日に閲覧

20代の“はたらき”データベースキャリアコンパス 国内大学別年収ランキング

https://doda.jp/careercompass/ranking/daigaku_nenshu.html

東京2020大会ボランティア

<https://tokyo2020.org/jp/special/volunteer/activity/>

英語は転職に有利！？グローバル採用の実態調査2014

<https://doda.jp/guide/saiyo/011.html#04>

年収・転職 実態調査 vol.7：キャリアインデックス

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000008.000018685.html>

香港と日本の社会環境の違いと様々な思い出

井上菜緒子

今回の香港研修では、企業研修・中国語の授業・観光・研修メンバーや他大学の人との交流など、多くのことが経験でき、人生の中でもかなり密度が濃かった1か月だったように思う。このレポートでは、私が香港（や深圳）に行って感じたいくつかの日本との社会環境の違い、そして他の様々な思い出について順番に書いていきたい。

1. 多言語社会

香港でまず衝撃を受けたことは、香港の人が広東語・英語・北京語をととても流暢に操り、想像していたより多くの人日本語も話せるということであった。当初研修先や大学内の人が英語や日本語を話すのを見ても、尊敬しつつも「まあ皆さんエリートだし、英語が公用語の地域だしなあ」と大して気にしていない面があった。しかし、日々過ごすにつれマクドナルドやタピオカスタンドといった普通の飲食店、チケット売り場、駅の窓口といったほとんどの場所で普通に英語が通じ、その上発音がとてもきれいで聞き取りやすい、ということに非常に驚いた。香港人の言語能力に驚き尊敬すると同時に、ここで英語を話せないということは、日本よりも遥かに職業選択が狭まるということなのだと思います、香港社会の厳しさの一端を垣間見た気がした。

日本で英語を流暢に操れることは大きなアドバンテージであり、就職や昇進などの面でかなり役に立つが、香港では英語を流暢に話せるということはある意味当たり前で、さらに別の言語や専門性を求められる社会なのだ、ということを感じた。

私自身、普段自分の英語力がまだまだ足りないというのは自覚しつつも、なかなかその状態を変えようと努力することもなく、かといって中国語を学んでいるときも「このフレーズ英語だったらすぐ出てくるのになあ、勉強する意味あるのか」と生意気に考えてしまい、どちらの言語学習にも身が入らない節があった。しかし香港に行って、当たり前だが、どちらの学習も自分には必要なのだ、と痛感した。せつかくのこの意識変化を今後に生かしたいところだが、自分1人で勉強する、というのは怠惰な私にはハードルが高いので、せめて秋冬学期に言語系の履修をたくさん入れることを検討したい。

2. 小さな政府の社会

私が香港で当初少し気になったことの2つ目は、香港では電車やバスの交通費は格安であるが、他の物の値段は日本より少し安いくらいか、それほど変わらないということであった。香港研修に参加する4か月ほど前に、学内の中国交流センターが主催する北京ツアーに行ったときは、かなり日本より物価が安かったため、香港の物価と日本の物価の変わらないさ

に最初は驚いた。そして、むしろ香港の家賃に至っては日本よりも遥かに高いのに、最低賃金は東京よりもかなり安い。税負担が軽い分お金持ちは住みやすいのかもしれないが、中程度以下の所得の一般人が暮らしていくのは、なかなか大変な街なのではないか...?と研修を楽しむ間ぼんやり考えたりした。

また、Job Shadowing でお世話になった日立香港の Andy さんや、研修全体でお世話になった Yeung さんとお話ししているときも、香港政府はスマートシティ計画や中小企業の IT の活用に多額の補助金を出している、という話を聞くことができた。当初は「へー香港政府って金払いがいいんだなあ」くらいにしか考えなかった。しかし後から考えてみると、日本だと社会保障に回されるようなお金が競争力強化に回されているのかもしれないと感じた。交通費の破格な安さを考えると、多少 MTR に公金が使われているのかもしれないし、公共住宅建設といった福祉的な政策が行われているとはいえ、やはり香港は低福祉低負担の地域なのだと実感した。しかし、香港政府の予算配分について十分にあたれなかったもので以上には個人の想像も入る。

大学で社会政策について勉強していると、どうしても授業中に日本国内や欧米以外の事例を学べる機会は少ないが、今回距離的にも日本に近い、香港という低福祉低負担な地域で一か月過ごす経験ができたのは非常に興味深かったと考える。

3. デモについて

香港ならではのトピックである。寮のエレベーターには中国語・英語・日本語で宣伝のポスターが貼ってあり時々内容も更新されていて、研修中もデモに何回か実際に遭遇することになった。残念ながらこのことについて香港の学生と直接話せる機会はなかったし、実際にデモに参加してきた訳ではないので薄っぺらな感想にはなってしまうが、彼らを感じる中国の脅威や今までの発言の自由がなくなるのではないかという危機感、また自由な選挙を求める気持ちは日本で私たちが想像するよりも強いのだということが分かった。

日本の報道を見ると、デモの暴力的な側面が注目されがちである。しかし、香港に行って、香港の多くの人が日本では当たり前にある（とされている）、将来的な発言の自由の保障や選挙権を求める気持ちを共有していて、デモの担い手の多くはあくまで普通の市民なのだ、と私は感じた。このように、実際に現地に行って空気を肌で感じられただけでも、この時期に香港に行ったかいがあったと思う。今後の香港の動きにはずっと注目していきたいと考えているが、自分がどの立場に立つか、またどの立場に立っている人が書いた記事に触れるかによって同じことでも 180 度評価が変わってしまう点で、香港情報を得ることの難しさも感じている。

4. 香港と深圳の違い

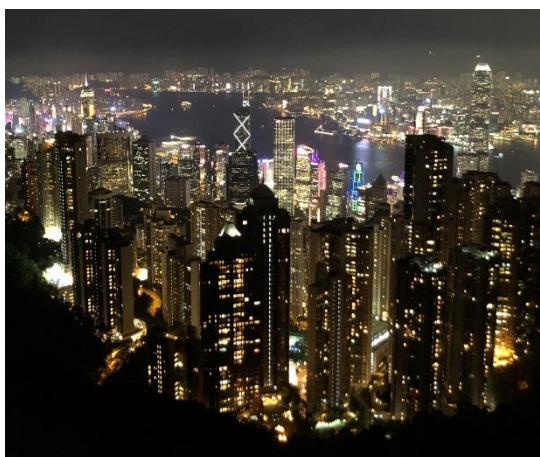
香港は国際金融センターとして従来からとても発展しているが、近年お隣の深圳もスタートアップの拠点として急成長していると言われている。そのため、研修中にぜひ深圳にも

行ってみたいと思っていたのだが、半日ではあったが実現できたので訪れて感じた違いについて記したい。

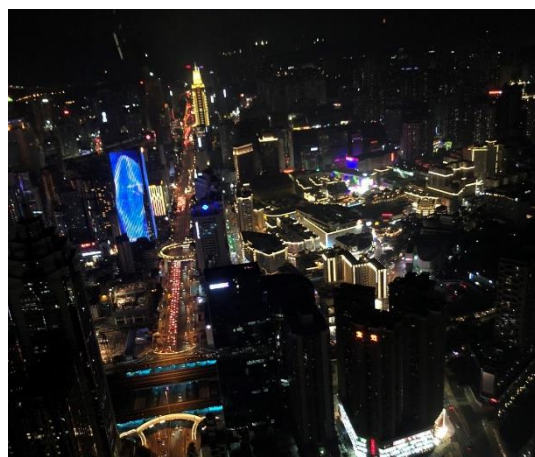
まず両都市の似たような点としては、料理や地下鉄の交通網の充実度などが挙げられるが、大きく感じた違いは街の雰囲気であった。深圳は半日夜に回っただけだったが、展望台から見ると違いが大きく分かり、香港の夜景は「100万ドルの夜景」と評されるほど煌びやかでカラフルであったが、深圳の方は投機目的のビルが少なくないのか立っている建物の数の割に明かりが少なく、なんだか町全体がゲームに出てきそうな雰囲気だった。また深圳では、様々な表示が繁体字ではなく簡体字だったり、コーラの値段が半分だったり、やけに防犯カメラの数が目立ったり、(両替所のお姉さんが仕事中にメイクをしていたり)と違いを感じる場面は多かった。

香港と深圳はとても近く、特に大学からは30分電車に乗れば国境の駅に行けるほど地理的には近所ではあるが、イミグレーションを通らなければいけないことや、上に挙げた様々な違いを感じる事ができ、想像よりも近くて遠いところなのだ、ということが分かった。

(以下左が香港、右が深圳の比較画像)



香港



深圳

5. あこがれ感の地域差

香港では日系企業の広告や、見た感じそこまで日本とは関係なさそうだが、とりあえず「の」を入れて、なんとなく日本っぽい雰囲気を醸し出した広告が目立った。それらから香港へ進出する日系企業の多さと日本への信頼感、また漠然とした日本へのあこがれ感のようなものを感じることができた。ところが、深圳に行ったときは日系の広告はほとんど見ず、むしろ香港製であることを売りにしている広告があり、こちらでは深圳での香港へのあこがれ感のようなものを感じた。日本では、欧米へのあこがれからなのか外国人モデルを起用した広告が多く、またカタカナ語や英語がかっこいいという風潮があるので、このあこがれ感の地域差と一方通行さを見ていてとても面白かった。

6. 課題と感謝

この1か月間の研修は、色々な面で自分の直すべきところが浮き彫りになった日々でもあった。それと同時に、他の研修メンバーの尊敬できる点をたくさん見つけた日々でもあった。

日立での **Job Shadowing** では、社員の方の言っていることはギリギリ分かるものの、自分から発言する時に思うように英語が出ずもどかしい思いをしたり、アンケート調査ではなかなか結果を出せなかったりした。また、普段の生活でも女子とは思えないほどギリギリの時間に起床してバタバタ準備するあまり、もはやネタになる程であったり、宿題についてもいつもギリギリにならないとやらなかったり、直すべきところは枚挙にいとまがない。

しかし同時に、他の研修メンバーは語学に対する努力や生活の送り方、リーダーシップや他大と積極的に交流しようとする姿勢、トーク力など色々な点でそれぞれ尊敬できる人ばかりだった。学年も普段所属するコミュニティーも性格もバラバラなのに、集まって1か月過ごせる機会はなかなかないし、過ごしていてとても心地よかった。迷惑をかけたこともそれなりにあったと思われるが、全員のメンバーには、とても感謝・尊敬の思いでいっぱいである。そしてこれからも折に触れて集まれたらいいな、と思っている。

最後に、この研修に関わった全ての方々に深く感謝したい。本当にありがとうございました。

海外研修だからこそできた交流

安永殷

一か月という期間は長いといえば長く、短いと言えば短い期間である。しかし、言語もあまり通じない海外での一か月の生活といった経験は非常に貴重であるので、その一か月をどう有効に使うのかが重要である。そこで「香港に行ったからこそできること、また研修プログラムといった環境だからこそできる経験をしよう」と思った。もちろん中国語を学ぶために参加したプログラムではあるが、机に座って中国語を勉強するだけなら日本でもできるはずだと思う。今回のコラムでは、香港研修に参加したからこそできたいくつかの経験について書きたい。

①アメリカ人達との交流

香港中文大学には、研修プログラムでなく交換留学生として在学している留学生も多くいる。その中で仲良くなれたのは、アメリカから来た3人の留学生であった。共用キッチンでお酒を飲みながら課題をしている彼らに話をかけたのがきっかけとなり、その日以降彼らと食事をしたり、夜遅くまでお酒を一緒に飲んだりしながら、お互いのことについて話し合った。中国語の勉強については、日本のように漢字を使う国では中国語の発音が難しいが、彼らにとっては漢字を覚えるのが非常に難しい、といった中国語に対する違う観点を共有した。また、恋愛の話に関しては、お互いに全く違う恋愛の文化に対しておどろき、悩みなどを相談する時には、真剣に聞き、自分の価値観を熱く語り合った思い出は印象深い。もちろん、アメリカ人や他の外国人は日本にもいるが、実際、我々が日本にいたら彼らと交流できる機会があるのかと考えたら、また別の話になる。仮に機会があったとしても、その機会を活かせるかも疑問である。言語があまり通じない海外で生活しているといった共通の立場があるからこそ、近づきやすかったと思う。

②卓球

香港研修で「卓球」は自分にとって欠かせない重要なキーワードである。香港研修での自分の多くの交流関係は、卓球から始まったからである。同じプログラムに参加した他大学の人や欧米からの留学生とも卓球を通じて仲良くなり、そこから一緒に食事会や観光などに繋がるといったことが出来た。コミュニケーションがあまりうまくいかなかった外国人であってもスポーツで通じ合い、スポーツの後に互いの文化について長い時間熱く語り合えた経験は、自分の世界観に大きく影響を与えた。また、今後言語の壁にぶつかってもそれを乗り越えることができるといった自信がついた。

③研修プログラム内の交流

香港研修には、一橋大学からの学生だけではなく、他大学や外国から参加した学生も多くいた。留学してきて、一橋大学の人しか関りがなかった自分はもちろん、他の一橋大学の人達も他大学の人達と交流ができたところを、香港研修のよいところだったと評価している。確かに、日本にいる他大学の人とは日本でも交流できる。しかし、同じ大学の友達であっても、お互いのスケジュールが合わなくて会えないことがたくさんあるのに、他大学の人とはそれよりも大変であるはず。香港研修ではみんな同じ時間に授業を受けて、同じ時間に終わるといった環境で生活をする。もちろん一か月の間の海外研修なので知り合いもなく、バイトやサークルなどの私生活もない。よって、授業が終わると、一緒に食事をしたり、勉強したり、観光をするなど、日常を一緒に過ごすことが出来るのである。特に、**Lower 1**のクラスは団結力がよく、初日から夕飯を一緒に食べ、団円で観光に行った時もクラスで行動したりする姿を見せた。他のクラスの人達もみんな仲良く交流し、大切な思い出を残した。たまには、共用ロビーで夜遅くまでおしゃべりしたり、ボードゲームや人狼ゲームなどの遊びもしたりと、勉強以外の経験も決して時間の無駄遣いだとは思わない。家族よりも一緒に過ごす時間が多く、特に自分は田村さんと睡眠時間を除いた 20 時間を一緒にいた。

これらの経験は全て「香港研修」といった特殊な環境だからこそできた経験だと思う。中国語の実力向上はもちろん、他人との交流も大切な経験になる。家族のように同じ部屋を使って、日常を一緒に過ごす生活は簡単にはできないことである。その経験から世界観が変わった人もいるし、他人との交流に自信がついた人もいる。香港研修の魅力は、このような点にあったのである。

編集後記

編集長：山口悠作

一橋大学から一年生二人、二年生八人、四年生一人、院生一人が参加した 2019 年夏の香港研修。この中には海外に行くのが初めてのメンバーもいて、香港での一ヶ月間の生活に不安をもっていた人も多かったです。実際に生活が始まって食事が口に合わないとか、水が日本ほどきれいではないので使うのにためらうとか、生活環境に対応できない、といった声を多く聞きました。確かに食や衛生の面を主として日本とは異なる環境でしたが、それ以外の面では、とても生活しやすかったのではないかと思います。実は香港の夏の気候は、蒸し暑いものの、日本と比べても気温はそれほど高くありません。私が個人的に心配していたのは、この暑さと、それによる虫の多さと大きさなのですが、実際には日本とあまり変わらないか日本よりもましでした（10cm くらいのカタツムリを 2 回ほど見かけて思わず声を出すほど驚きましたが）。その他、香港中文大学の学生を主として日本語を話せる人が時々いたり、他大学のプログラム参加者も含めて英語や中国語がうまいメンバーが少なからずいたりしたので、言語面で困ったときもなんとかなったように思います。言葉が伝わらなくても、その場の状況やジェスチャー、スマートフォンなどの道具を使うなどの代替手段で、なんとかなることもありました。デモを除けば治安もよく（マカオでの話ではありますが紛失した私のスマホが戻ってきたのもこのおかげです）、生活環境はよかったです。

企業研修では、香港だからこそできた発見や勉強があったように思います。日本では起りえないようなサービス面、言語面などでの困難に遭遇したり、現地企業で働いている現地人や日本人の方にしかない視点からのお話を直接聞く機会があったりしました。これらの経験によって問題解決能力が高まっただけでなく日本的な働き方に対する価値観とは違った価値観が得られたと思います。

また一橋大学メンバーの中には中国語を全く習ったことが無い人から HSK6 級をすでに取り終えている人までいましたが、共通して 3 週間集中して中国語を学ぶという貴重な機会と、これからの課題を得たように思います。日本に限らない他大学も含めて中国語がうまい人に出会って刺激になった人も多かったと思います。例えば、欧米系の学生はスピーキングとリスニングに秀でていたり、日本人でもレストランで中国での注文や会話をそつなくこなせていたり、熱心に勉強したりする人たちと身近に過ごせたのは貴重な経験でした。また中国語に限らず、普段一橋大学で過ごしているだけでは会えない人たちが、様々な特技や魅力を持っていることに気づけたりしたことも、この香港研修だからこそです。

最後に、この研修の計画・支援に携わられたすべての関係者、研修先で出会った方々に感謝を申し上げます。

2019年度 短期海外研修（香港）報告書

発行： 2019年12月

編集： 短期海外研修（香港）編集班

山口悠作（編集長）

栗田寛樹

田村草太

発行所： 一橋大学国際教育交流センター

印刷： 一橋大学附属図書館

全学プログラム

主な対象者	プログラム名	奨学金等	条件等
学部3-4年生 大学院生	一橋大学海外派遣留学制度（交換留学制度）	大学基金等 （給付型）	<ul style="list-style-type: none"> ● 本学協定校への交換留学（留学期間1年以内） ● 派遣先大学毎に異なる語学要件等有り ● 募集人数160人程度 ● 単位互換認定可
学部3-4年生	グローバルリーダー育成海外留学制度	大学基金 （給付型）	<ul style="list-style-type: none"> ● アメリカ・ハーバード大学 ● 英国・オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、LSE ● 派遣留学期間1年以内 ● 派遣先大学毎に異なる語学要件等あり ● 募集人数4人程度 ● 単位互換認定可
学部2-4年生	一橋大学サマースクール等留学制度	大学基金等 （給付型）	<ul style="list-style-type: none"> ● アメリカ・ペンシルヴァニア大学、スタンフォード大学、カリフォルニア大学（ロサンゼルス校/アーヴァイン校/デーヴィス校/バークレー校） ● イタリア・ボッコニー大学 ● 英国・LSE、ロンドン大学アジア・アフリカ研究院、グラスゴー大学 ● オーストリア・ウィーン経済大学 ● スペイン・ESADEビジネススクール ● デンマーク・コペンハーゲン経済大学 ● フランス・パリ政治学院、HEC経営大学院 ● 韓国・ソウル大学 ● シンガポール・シンガポール経営大学 ● 中国・北京大学、中国人民大 ● 香港・香港大学 ● オーストラリア・クィーンズランド大学 ● 留学期間2週間～2ヶ月程度 ● 派遣先大学毎に異なる語学要件等あり ● 単位互換認定可
学部生	短期海外研修（夏期・香港中文大）	大学基金等 （給付型）	<ul style="list-style-type: none"> ● 中国・香港中文大 ● 留学期間4週間程度（夏季授業休業期間中） ● 6単位認定、大学院生は単位認定不可 ● ビジネス体験1週間+語学研修3週間 ● TOEFL 500 (ITP)以上が望ましい
	短期海外研修（夏期・モナシユ大学・グローバル・プロフェッショナル・プログラム）		<ul style="list-style-type: none"> ● オーストラリア・モナシユ大学 ● 留学期間4週間程度（夏季授業休業期間中） ● 6単位認定 ● TOEFL71 (iBT), IELTS5.5程度を有すること ● TOEFL530 (ITP), TOEIC700も可能
	短期海外研修（春期・スペイン企業派遣）		<ul style="list-style-type: none"> ● スペイン・Berge社 ● 留学期間5週間程度（春季授業休業期間中） ● 7単位認定 ● TOEFL79 (iBT), 550 (PBT), TOEIC730, IELTS6.5程度（スペイン語能力（DELE中級以上）保持者は優遇）
	短期海外研修（春期・シンガポール経営大学・マレーシア工科大学）		<ul style="list-style-type: none"> ● シンガポール・シンガポール経営大学/マレーシア・マレーシア工科大学 ● 留学期間3週間程度（春季授業休業期間中） ● 4単位認定
学部生	海外語学研修（英語）	大学基金等 （給付型）	<ul style="list-style-type: none"> ● アメリカ・スタンフォード大学、ペンシルヴァニア大学、ボストン大学、カリフォルニア大学（デーヴィス校/アーヴァイン校）、テキサス大学オースティン校 ● 英国・グラスゴー大学、エセックス大学、サセックス大学 ● オーストラリア・ニューサウスウェールズ大学、シドニー大学、クィーンズランド大学、モナシユ大学 ● 留学期間4週間または5週間程度（夏季又は春季授業休業期間中） ● 5-7単位認定（派遣先大学により異なる）※2018年度の場合 ● 派遣先大学毎に異なる語学要件等有り
	ドイツ語短期海外語学研修		<ul style="list-style-type: none"> ● ドイツ・アーヘン語学アカデミー ● 留学期間4週間以内（夏季授業休業期間中） ● 6単位認定 ● 大学院生も参加可能だが、単位認定不可
	フランス語短期海外語学研修		<ul style="list-style-type: none"> ● フランス・サン＝ティエンヌ大学附属の語学・文明国際センター または グルノーブル大学附属の大学フランス語教育センター ● 留学期間4週間程度（春季授業休業期間中） ● 6単位認定

経済学部・法学部・社会学部グローバル・リーダーズ・プログラム

主な対象者	プログラム名	奨学金等	条件等
学部生	経済学部短期海外調査（アジア新興国）	大学基金等 （給付型）	<ul style="list-style-type: none"> ● 今年度は中国を予定 ● 留学期間10日間程度（夏季授業休業期間中） ● 運動する基礎ゼミナールとセットで履修し8単位認定（春・夏学期基礎ゼミナール2単位、秋・冬学期基礎ゼミナール2単位、短期海外調査4単位）
	経済学部短期海外調査（EU圏）		<ul style="list-style-type: none"> ● 今年度はフランス、ベルギーを予定 ● 留学期間11～12日間程度（春季授業休業期間中） ● 運動する基礎ゼミナールとセットで履修し8単位認定（春・夏学期基礎ゼミナール2単位、秋・冬学期基礎ゼミナール2単位、短期海外調査4単位）
学部3-4年生 大学院生	法学部GLP国際セミナー（ベルギー）	大学基金等 （給付型）	<ul style="list-style-type: none"> ● 今年度はソウル大学・ルーヴァンカトリック大学を予定 ● 留学期間2週間程度（夏季授業休業期間中） ● 2単位認定 ● 全学部を対象とする
学部3-4年生	法学部GLP国際セミナー（韓国/英国/香港・台湾）		<ul style="list-style-type: none"> ● 今年度は韓国、英国、香港・台湾の3つのプログラムを予定 ● 留学期間は3日間～4日間程度 ● 2単位認定 ● 全学部を対象とする
社会学部 2年生	社会学部GLP海外短期調査	大学基金等 （給付型）	<ul style="list-style-type: none"> ● 留学先はフィリピン、マレーシアを予定 ● 留学期間は7日間程度（夏季集中講義期間中） ● 4単位認定 ● 上書き履修不可、反復履修不可

日本学生支援機構 (JASSO)

主な対象者	プログラム名	奨学金等	条件等
学部生 大学院生	官民協働海外留学支援制度 ～トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム～	給付型	<ul style="list-style-type: none"> ●日本国籍を有する者又は日本永住者 ●留学終了後、日本の在籍大学で学業を継続又は学位を取得する学生 ●月額の滞在費に加え、授業料及び留学準備金を支援 ●家計基準あり
大学院生	海外留学支援制度 (大学院学位取得型)	給付型	<ul style="list-style-type: none"> ●外国の大学院での修士又は博士の学位を取得する者 ●支援期間は修士2年以内、博士課程は原則3年以内 ●月額の滞在費に加え、別途授業料を支援 ●その他、学業成績要件、語学要件、年齢制限等あり
学部生 大学院生	第二種奨学金 (海外)	有利子貸与型	<ul style="list-style-type: none"> ●留学年度の前年度に、国内の大学等を卒業 (修了) 見込みであり、進学 (入学もしくは編入の者) をする者 ●申込手続き完了時において、国内の大学等を卒業 (修了) 後3年以内の者 ●貸与月額 (選択制) 大学 : 2万円～12万円の範囲で1万円単位区切り 大学院 : 5万円, 8万円, 10万円, 13万円, 15万円 ●家計基準あり
学部生 大学院生	第二種奨学金 (短期留学)	有利子貸与型	<ul style="list-style-type: none"> ●国内の大学に在籍中に、海外の大学・大学院・短期大学に3ヶ月以上1年以内の短期留学をする者 ●貸与月額 (選択制) 大学 : 2万円～12万円の範囲で1万円単位区切り 大学院 : 5万円, 8万円, 10万円, 13万円, 15万円 ●家計基準あり

※日本学生支援機構(JASSO)の海外留学奨学金パンフレットにも、奨学金情報が網羅されています。日本学生支援機構 海外留学のための奨学金http://www.jasso.go.jp/ryugaku/study_a/scholarship/index.html

一橋大学基金海外留学支援奨学金等

主な対象者	プログラム名	奨学金等	条件等
学部生	一橋大学海外留学奨学金	給付型	<ul style="list-style-type: none"> ●如水会・一般社団法人明治産業人材育成支援会の寄付による ●一橋大学海外派遣留学制度による派遣留学生 (学部生のみ) 全員への奨学金支援 ●留学準備金及び滞在費の支援
大学院生	一橋大学基金大学院生海外留学奨学金	給付型	<ul style="list-style-type: none"> ●奨学金支援期間1年以内 ●募集人数4人程度 ●月額の滞在費に加え、別途研究活動費を支援 ●留学中は休学することも可能
学部生	榊原忠幸基金海外留学支援資金	給付型	<ul style="list-style-type: none"> ●故榊原忠幸氏の御令室の寄付による ●学業優秀で、かつ経済的支援が必要な者 ●海外語学研修(英語)の派遣先大学の参加費用・滞在費等の支援 ●支援人数年間10人程度
学部生	堀海外留学支援資金	給付型	<ul style="list-style-type: none"> ●堀誠氏の寄付による ●愛知県内の高等学校を卒業した者で、通年(1年間)に渡り交換留学を行う者 ●留学に必要な経費の支援 ●支援人数年間5人程度

その他の民間財団等の海外留学奨学金

<http://international.hit-u.ac.jp/jp/abroad/scholarship/index.php>

民間財団等が募集を行う海外留学のための奨学金があります。奨学金によっては、学内選考が必要な場合がありますが、直接応募できるものが多数です。民間財団等の奨学金のうち、大学に公募情報が届いたものについてはこのページおよび西キャンパス本館1階教務課教務第五係前の掲示板にも掲載しています。

関係URL等

プログラム	URL
一橋大学海外派遣・グローバルリーダー育成留学制度	http://international.hit-u.ac.jp/jp/abroad/haken/index.html
一橋大学基金大学院生海外留学奨学金制度	http://international.hit-u.ac.jp/jp/abroad/grad/index.html
一橋大学サマースクール等留学制度	http://www.hit-u.ac.jp/kyomu/info/news.html
海外語学研修 (英語)	http://international.hit-u.ac.jp/jp/abroad/FESTA/index.html
ドイツ語短期海外語学研修	https://sites.google.com/site/gogakukenshu/
短期海外研修 (スペイン、香港、シンガポール、モナシュ)	http://international.hit-u.ac.jp/jp/courses/index.html
経済学部 短期海外調査	http://www4.econ.hit-u.ac.jp/glp/?page_id=7
商学部 渋沢スカラープログラム	http://ssp.cm.hit-u.ac.jp/
経済学部 グローバル・リーダーズ・プログラム	http://www4.econ.hit-u.ac.jp/glp/
法学部 グローバル・リーダーズ・プログラム	http://www.law.hit-u.ac.jp/faculty/glp
社会学部 グローバル・リーダーズ・プログラム	http://www.soc.hit-u.ac.jp/glp/ja/index.html
日本学生支援機構等の奨学金について	http://international.hit-u.ac.jp/jp/abroad/jasso/index.html

お問い合わせ先

国際教育交流センター留学生・海外留学相談室 URL: <http://international.hit-u.ac.jp/jp/cgee/advising/index.html>

学務部教務課教務第五係 TEL: 042-580-8764 / E-mail: edu-gs.g@dm.hit-u.ac.jp

教務課グローバルスキルズチーム (海外語学研修 (英語) 及び一橋大学サマースクール等留学制度)

TEL: 042-580-8175 / E-mail: g-skills.g@dm.hit-u.ac.jp

※上記のプログラムは、2019年7月時点の予定であり、今後予告なく変更・追加等が生じる場合があります。